

冬 雷

短歌雑誌

TOURAI



二〇二五年十一月一日発行（毎月一回一日発行）
第六十四卷第十一号（通巻七六五号）

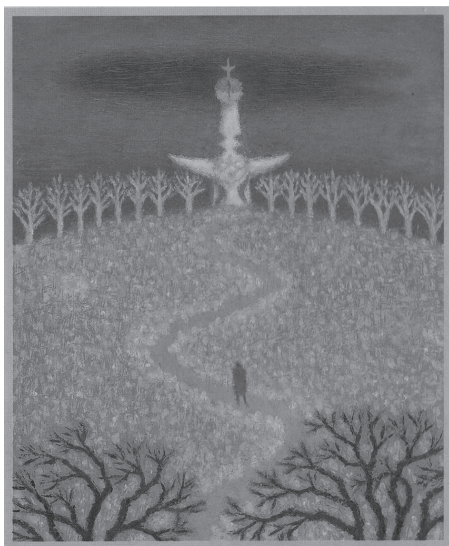
11月号・2025年

冬雷の表紙絵をたどる（二〇〇二年・平成14年）

本年も大阪での万国博覧会が開催されたが、この絵は昭和45年に開かれた大阪万博をテーマとしている。参加国77、入場者数が六千四百二十数万人次だったと作者の加納久氏が記す。見えるのは「太陽の塔」である。

絵は大阪在住だった故水谷慶一朗氏歌集『冬響』より△光りあふ樹木のなかに身を立てて冬蒼空を眩しきみあたり▽という一首をイメージしたもの。

〈編集室〉



11月号 目次

冬雷集	1
作品一	20
十一月集	36
残響集	40
作品二	46
作品三	56
九月号冬雷集評	桜井美保子 14
九月集 / 残響集評	鈴木やよい 15
大友柳太朗と美空ひばり ⑥	大山敏夫 16
九月号作品一評	小林芳枝・藤田夏見 34
九月号作品二評	井上菅子・江波戸愛子 42
九月号作品三評	山本三男・橘 美千代 44
交流他誌に学ぶ	〈編集室〉 54
九月号十首選（冬雷集・九月集 / 残響集）	56
九月号十首選（作品一・作品二・作品三）	58
歌集 / 歌書御礼	編集室・佐藤靖子 61
伝田幸子歌集『勿忘草』を読む	桜井美保子 63

冬雷集

大山 敏 夫 埼玉

目覚めゐてなほ暗ければ四時半を待ちて出でて来ぬ早朝の歩行
日中は沸騰気味の気温ながら暁の薄明風爽やかに

あかときの薄暗がりを歩み来て誰もゐない公園のゴミだらけのベンチ
酒の瓶ビールの空缶転がりて夜に群れゐたる如何なる輩

公園の長ベンチ下に落ちゐるは財布かカード入れか何とも軽く
ネパールの女性らしき証明証と怪しげな紙幣一枚ゆうちょカード一枚

駅前交番は夜間不在にて拾ひ物持ち帰り昼に出直す

一丁目一番地ノ一といふ表示 拾ひ物届けに来し駅前KOBAN
届けたる拾ひ物見てつい先ほどこの人が来てゐたと巡査言ふ

赤間 洋子 東京

酷暑故に休み続きし体操教室再開して流す心地良き汗

帰宅してシャワーを浴びて昼食を食べればやがて睡魔に襲はる

ほんの少し眠れば心晴々と午後はゆつくり新聞を読む

教へ子の「NN」に届く秋刀魚情報今年は豊漁肥えて安価と

夕方は近くのスーパーの魚売り場肥えたる秋刀魚とあさりを買いぬ

秋刀魚には大根おろしを添へたくて二分の一本忘れず求む
老いてなほ我が目で確かめ調理できるその幸せを感謝して食ぶ
今年また公募展に応募して入選発表落着かず待つ
夜届くLINE情報公募展に今年も入選喜びて受く

兼目 久 栃木

孫娘修学旅行のお土産に千枚漬けを買ひて来たるも
菜の花の根つ子は太く育ちたり人参の根と遜色なきかも
穂を揃へまつすぐ伸びたる背高泡立草ことしも秋に実を結ばんとす
寝ねむとするしんしんと時が過ぎ去りて夜のしじまは深くなりゆく
教員になりたての昭和35年トイレはポチャーンと音す
カレンダーより明治生まれの欄は消ゆ父親母親明治に生まれし
ラーメンと発音すれば通ぜずにラーミエンと発音すれば通ず（中国旅行）
何十年使ひ古したる毛筆の先が揃ひて使ひ易しも

森 藤 ふ み 東京

ビル陰より半月出でるも西空より線状降水帯の近づく予報
起き抜けに開けたる窓に凄まじき雨の勢ひ思はず閉ざす
記録的短時間大雨情報とテレビに映る雨の今わが窓を打つ
テレビに映る人の見てゐる地図江東区のみ赤き色して
この年も娘ふたりが誕生日祝ふとランチに誘ひくれたり
ビル地下のレストラン街に人あふれどこの店にも長き行列

人の波かき分けかき分け次の地下街へ進みゆくなり大汗かきつつ
マンションの排水管の清掃日ファンつきベストの作業員二人

こどもまつり

櫻 井 一 江 東京

明治期の「月島第二号埋立地」その名残れる「二号地の神輿」
夏休み「こどもまつり」と名付けられ二号地の中小神輿の出番
タワマンの広場に模擬店ゲームなど町会初のイベント開催
町会のチラシ二千余タワマンの許可得其々ポスティングしたり
ポスティングの効果あらはれ模擬店に長蛇の列見え笑顔の役員
缶ジュース二百個冷やし「マック」並べ神輿の子等の労ひ準備
炎天下舗道に弾ける子等のこゑ水かけ神輿を担ぐ一団の
まつり終へ神輿の子等に菓子袋ことば掛けつつ手渡す安堵

富 田 眞紀恵 富山

勉強は死ぬまでといふ声きこえきて施設のいすに坐りなほす吾
働くといふ言葉は吾に死語となり施設のくらしも長くなりたり
ゴールとは近づく吾にニッコリと手を振りながら遠ざかるもの
夕陽にいらか輝く一軒の家を見てをり施設の窓より

青 木 初 子 神奈川

洪水になるほどの雨は望まねど庭木を潤す程程は欲し
雷鳴のまた遠のきてガラガラの暑き太陽射し来る今日も
午後よりの強き日射しを隠しくる積乱雲のありがたきかな

根を付けて抜きたる夏の荒草は土に伏せ置き庭土守る
朝より気温の高く今日もまた早起きはせず草はそのまま
山をなす抜きたる荒草日日の強き日射しに見る見る枯れる
山茶花の木下のめぐり草残る毛虫ゐるかも怖くて行けず

吉 田 綾 子 ☆ 茨城

ひさびさの雨に潤う草木の静なる庭にみどり葉ひかる
待ちいたる雨に勢う櫨、櫨枝葉を広げ大空隠す

胸元に首より下がる黒縁のメガネは義母の形見のひとつ

メガネをば度々探している我に「首から下げたら」と孫の提案
十三回忌すみたる義母の黒縁メガネ文字の霞みて新聞よみ難し

「書留です」の声に立つ市役所からの「祝、長寿」の封書が届く

心ある市長の祝辞に安らぎぬしかと生きよう老いゆく日々を

頑張れと心の中の叫びをばこころで受け取る緑茶のうまし

中 村 晴 美 茨城

スターリンク良きサービス始まるも使ひ道のわれにあるか

災害時役に立つかスターリンク米国頼り危険な気のす

この暑さ何時まで続く五月から終はらぬ夏に疲弊の九月

少しだけ温度下ぐると現るる激しく鳴く蟬羽音震はす蚊

百ミリの雨ふれど庭の水捌け低き水戸へと流れ行きたるか

大雨に高台の強み改めて眼下の水戸に特別警報

東京も水の溢るるニュースあり百ミリの雨銀座品川も
大都市も五十ミリが限界なり百ミリの雨は想定外らし

山 口 嵩 福島

小雨降る一日となりて和みたり猛暑のもとの草木と我

梅雨らしき夕立らしき雨はなく降ればたぎりて道路を流る

自動車のライトのあかり刻みつつ道打つ雨にワイパーせはし

土砂降りの雨はやうやう治まりて蟋蟀の音はたちまち拡がる

降雨確率五十パーセントのこの三日ドクターヘリの音もなだらか

ちよつと停め「うみたてたまご」と誘ふ声たまに求める我家の前に

満足に二食も食へぬ子らの事どれほど知るや総裁候補ら

橋 本 文 子 鳥取

同室の人が家族にかける電話この地方の会話と思ひつつ一人
予測せぬ入院の日々身にしみて仕事帰りの娘ひたすらに待つ
九十五歳の入院は念のためといふ事りハビリ体操難なくこなす
体操は鉄棒わたり棒懐かしく小柄な友と共に過ごしき

同室の人の静かに起き出す音してカーテン越しに朝を味はふ

退院の賑やかな会話済みてすぐ新しき人静かに入院

相撲巡業

酒 向 陸 江 ☆ 東京

猛暑日の一ト月続けば持て余すクーラー効かせた一人の自由を

猛暑日の日射し恐れてせつかくの万歩計の数値上がらず

隣町に相撲巡業来たる日は天の恵みか少し涼しく
九十歳越えたる友のユーモアと会話楽しく相撲観戦
手の届く距離を行き交う力士達肌つやつやと見惚れるばかり
力士達間近に見れば皆若しあどけなき仕草にふざけ合いおり
土俵上髪結実演、相撲甚句、初切しよつぎりなどの解説ありて
万来の拍手を浴びる地元力士立川出身十両日翔ひと志
取組の様子は見えれど足元をアップで映すテレビに及ばず

避暑

天 野 克 彦 大阪

うとましき暑さを逃れきたりけりかつてもきたる富士見高原
から松の林の中の貸し小屋にひとり隠れば楽しかりけり
虫しげきこの山小屋に寝ねんとす茂吉の歌を口ずさみつつ（つゆじも）
艶やかな女性遍歴したのちにこの地に逝きたる竹久夢二（サナトリウム跡）
「風立ちぬ、いざ生きめやも」の堀辰雄携へきたる小説を読む
から松の林の奥に來たりけり落ち葉積む道足沈ませて
連なるは八ヶ岳なりはるかには富士の山みゆ夕映のそら
大空の息吹きのごとく降りそぐ富士見が原の満天の星

最期のひと息

高 松 美智子☆ 栃木

声かける孫や曾孫に囲まれてベッド周りの賑やかな盆（八月十三日）
出勤のわれの足を止めるよな今朝の姑の呼吸の異和感（八月十五日）
喉元の呼吸の音の常ならず急ぎ呼びたる訪問看護師

逝く時は自分で決めていたかともわれの目のまえ最期の息吐く
ひととおりの縁ではなきとたびたびに共に暮らせる四十年を
四十年を共に暮らしし姑なり最期のひと息を見守れたる幸
お父さんが迎えに來たからと口々に舅逝きて十三年目の盆
最期まで食も気持も前向きに生ききる姿は姑そのもの

高 橋 説 子 栃木

忘れずに今年も参加すBSの録画「さだまさし長崎から夏」
原爆から八十年といふ夏に「繰り返さないで」とさだは繰り返す
落語家にロックバンドにバイオリニスト多彩なるゲストの「長崎から夏」
一曲だけ歌ひ演奏するために長崎に來るさだの友らは
こんなにも老若男女が声合はせ歌ふはさだの人柄なるべし
アンコール曲の「風に立つライオン」が溢れ大きなうねりとなれり
いつの間にか総立ちの人の祈り籠る「アメイジンググレイス」のハミングは満つ
同年代の歌手さだまさしを五十年推し活して來たやうなる吾か
小鍋ごと冷蔵庫に入れ「また明日」われのジャガイモごろごろカレー

大 塚 亮 子 東京

かつぎ手の子等の少なく子供みこし大人の加はりどうにか担ぐ
水かけ祭り今年も水は神輿のみ人は濡れずに通り過ぎ行く
子供用にと用意をしたるアイスクャンディー余りの多し子ら少なくて
嫁ぎ來し頃はバケツに水を汲み神輿の來るを今かと待ちき

若かりし頃は揃ひの浴衣にて水掛けられて町内巡りき
びしよ濡れとなりて夕方帰りきて風呂場に駆け込む勝手口より
マンションの建ちて見知らぬ人多く路地に立ち話することも稀
魚屋も八百屋もいつしか姿消し大きなスーパー建ちて幾年

潜水艦伊四十八号

嶋田正之 埼玉

出征の叔父を追ひかけ縋りつきゆくなと叫びし六歳の冬

満州に病死をしたる兄さんの敵を取ると言ひ残しゆく

潜水艦伊四十八号は魚雷艇回天四機を積みたる部隊

一人乗り魚雷艇なる回天は特攻自爆の捨て身の兵器

電報の戦死通知は二十年二月八日南方の海

国会図書館に調べて見れば南方のウルシー環礁に爆沈さると

誤りて彫りたる墓石と後に知る一月二十三日叔父の命日

八十年前のひもじき経験をガザの子供の映像に見る

七十年前上野の地下の暗闇に垢にまみるる浮浪児居りき

江波戸 愛子☆ 埼玉

メモ書きを入れむと来たる友の家新型ポストに替わりておりぬ

新型のポストへ入れ方わからずに呼び鈴おして友へ手渡す

求めきて鉢に植えたるコキアなり大きくなりてその花を識る

丈も幅もおおきくなりたるコキアの木そのやわらかな新緑に触る

大きいねとコキアに寄り来る人のおり昔に箒を作りしと言う

おおかたの花おわりたる庭中に木槿の白き花一つ咲く

幹太き古木を伐りてその中の宝を探す映像をみる

喉の痛み身体の怠さなくなりぬコロナの薬を飲みたる後に

稲田正康 東京

北海道四十度とふ数字あり緯度ではないよ気温なのだよ

六月に三十五度を超すといふ亜熱帯とはなれるや日本

杖もちてをれば気づかひくるる人コーヒークップ戻すことなど

ひな三羽大きくなりてなほも五羽水を浴びまた羽をつくろふ

ひときは長き蚯蚓は見えるのか舗装の道を横切りてをり

ジープなら目的にそぐふゆゑ売れるどうしてなのか考へなさい

隣屋の屋上にあるアンテナが輝く時とかがやかぬとき

橘 美千代 新潟

夏の日の暮れゆく刻はあかり消し衰へゆく日の名残りたのしむ

刻々と翳りゆくなか木槿の花闇に溶けゆくまでを眺めつ

八月の終り近づき仏壇のアレンジメントの供花も枯れゆく

このところ廃医院二軒とり壊され賑はひし日々の浮かびてむなし

取り壊され医院跡地は池になるこの明け方の激しき雷雨に

里帰り出産に娘もどり来ぬ体大きくトカゲを連れて

家うちに間なくみどり児の声響き猫とトカゲは目を見張りゐむ（マールと凛太郎）

五年以上医院続けむに必要と電子カルテの導入決めつ

長年の紙カルテから電子カルテに移る行程に覚悟をきめぬ

ブレイクあずさ☆ カナダ

やれ今朝は君の体調よりらしくバツハのテンポ安定しており

腰痛に厳しきバリトンサクスの重みよ夫はプレリユード吹く

ピアノのタンゴを君と合わせたり楽器を通してわれらは踊る

腰痛のバリトンサクスの追いかけるグランドピアノは蹠鞘炎持つ

「長旅」という名のタンゴ合奏すアルゼンチンをはるかに遠し

緑地に白き楓の標識は誘う大陸横断の旅

「マイルゼロ」起点に立ちて背伸びするペダル踏みだせ東の果てへ

町を抜け速度上げゆく東行き貨物列車に手を振るばかり

ただひとり平原州に住みし頃貨物列車を飽かず眺めき

野村 灑子 千葉

味噌汁の中に浮きたるオクラの切り口五角形なる白美しき

筋トレの映像見終へペットボトルの蓋にて試せばスツと開きぬ

俳優の亡き志村喬の顔に似る魚が水槽にゆつたり泳ぎぬ

玄関のブザーに立ち上がれずみざりつつ大声に言ふ「少々お待ち下さい」

長時間坐り立ち上がれずをりを年をとるとは何とも悲し

立ち上がるなど自然に出来し事いま為せずゐて筋肉の働き思ふ

田端 五百子 岩手

人々の人生乗せてバスは発つテールランプは闇に消えゆく

閑伽を汲み墓前に額づき振り向けば火災に茶色と変はる樹々みゆ

墓参りに出払ふ留守に生まれしと吾の誕生秘話幾度も聞く

独身の友は樹木葬えらびしとふ名さへ記さず数字の「一」を

恭順に寡黙貫きし伯母なりき三人の息子国家に捧げて

磯船の固きとも綱はるか越え土用の波の白く荒ぶる

猫じやらし揺れに揺れゐて過疎の町信号のみが律儀に点滅

山本 三男☆ 群馬

朝四時のまだ暗き庭クーラーの室外機の音しきりに聞こゆ

次々と新しき葉を伸ばしくるウチワサボテン見ていて楽し

散歩路のカヤの穂更に伸びていてスキの揺れる秋いづれくる

意識して左側の歯で噛まんとす右側の歯の傷みの進み

玄関のチャイムが鳴れば大方は息子宛なる荷物が届く

気になりていたる風呂場の掃除終え一息ついてコーヒーを飲む

一日に一匹くらいは庭に捕るバッタをつかむコツを覚えて

鈴虫が売られていたりもしわれが独り身ならば買いて育てん

夕食が終わればわれの時間なり藤井の将棋を終わりまでみる

中村 哲也 宮城

ほつほつとうろこの雲に青き空陽射しに櫓の壁白さ増す（仙台城脇櫓）
久能山東照宮の名宝展チケット売り場は行列長し（仙台市博物館）

家康の大河ドラマに馴染みある金陀美具足今に輝く

二メートル優ある金扇馬標実物前に人立ち尽くす
日用の蒔絵施す品々で暮らす家康想像付かず

武士であり同時に官位を持つ貴族香の道具にそを思はしむ
吉宗の桃に小鳥の画の巧みドラマで画力に触れるを聞かず

姉 川 素枝子 福岡

子連れて孫の家族が来たりたり休み日つづく五月のはじめ
親指を折りて歳をば教へゐる曾孫秋くん齒並びよろし
帰り際はあばに似てゐると言ひてゆく兄の玄太は小学二年
状差を整理してゐて見つけたる同級生の携帯番号

健康診断にあつちの心臓も強いねと言はれたるとふ声送り来つ
脊振嶺に行き筑前を見下ろして牡丹餅^{ぼたんもち}たたと息子来て言ふ
七日まり一戸の建ちて帰るたびわが家かこむ似たる家いへ
目眩はき氣いろいろありていろいろの薬のためと目を瞑りたり
爪もめば血流改善するといふ何時まで生きむ爪もみてゐる

井 上 菅 子 山形

北三陸の海に獲れたる煮干煮て今朝は肥大の茄子のみそ汁
駐車場飛び跳ね遊ぶ鶴鴿の三羽小さし兄弟ならむ
歌語り旅を語りし無二の友遙かなりしよ新盆がくる
些細なる事にも傷つき易くなる雨後太りたる夕顔の肌
塩蔵のわかめの封を切る瞬時吐息のやうな潮の香著し

竹の団扇の風が涼しく懐かしく夏の暑さと親しみ過ごす
猫が怯えて部屋の空気を乱したる祭り太鼓の音も遠のく
庭深く白藤一房揺れてゐる返り咲く花住む人見たし
賑やかな所好まぬわれながら来てみれば楽し新庄まつり

井 上 榎 子 新潟

どんぱちは使はぬけれど田畑^{でんぱた}の炎天作業はいくさと農家の人言ふ
土用干しの梅の習はし待たずして異常気象にはやも梅漬仕上ぐ
透かし百合反復にての土砂降りに腹這ひをれども照れば戻りぬ
異常気象に僅かに取れたと夫言ひてシンクにパリと茗荷を置きぬ
日焼けせる男の腕は逞しく花柄の日傘に幾度も振り向く
跡取りに口出し無用の思慮なるか夫の手腕を論して欲しき
朝顔と蛙と蜥蜴らわれがまく水を分け合ふ八月の日日
待ち望む土砂降りのあとの夕闇に連なる家の灯火は冴ゆ

小誌十一月の歌会は次の通り。

▽冬雷ネット歌会（ホームページにて掲載）

*誌上掲載の次作品の中より二首を自選したものを、参加者全
員で批評し合う、開かれたもの。（担当・桜井美保子）

▽川越歌会 十一月二十二日（土）午後1時～5時まで。

*JR・東上線「川越」駅西口より約五百メートル。「ウエス
タ川越」二階会議室にて開催。参加希望者は事前にご連絡く
ださい。（担当は、野崎礼子・高橋燿子・安川敏子）

▽九月開催の「川越歌会」は次の通り。参加者が以下の十名とな
り盛会でした。

倉浪ゆみ、首藤文江、須藤紀子、高橋燿子、立石節子、
永光徳子、野崎礼子、安川敏子、山崎 猛、大山敏夫。

*毎月その月の掲載歌を読み合い、批評し合います。なるべく
全員の発言できる、活発で楽しめる歌会を目指しています。

▽会員の皆様からの、この欄への投稿を募ります。各地での勉強
会情報等お寄せ下さい。（編集室）

九月号冬雷集評

桜井美保子

妻とともにしもつかれを五度作りたり

この冬うましと酒の肴に 兼目 久

栃木の郷土料理「しもつかれ」を幾たびも夫婦が力を合わせて作る。その和やかな空氣がほのぼのと伝わる。冬の夜の酒の肴としても楽しめる手作りの一品。歌には家庭の温かみや幸福感が滲む。

老たちに元氣をくれる幼らの明るい声が施設にひびく 富田眞紀恵

施設で暮らす人達と訪れた子供達との交流の様子が見えるようだ。単純化された一首。子供達の声に焦点を絞ったところがいい。力をもらって元氣になろう。

「おばあちゃん胡瓜上手に育てるね」

若者の言葉我にうれしく 橋本文子
若い人から掛けられた言葉を一首に収めて明快な作品。率直な氣持が読む側の心にも響いてくる。

過ぎし日に軒先借りし呉服店更地ひさしくドクダミ列なす 山口 嵩

かつて雨宿りで軒先を借りた呉服店の建物は無くなり、更地となってどくだみが勢いを増しているばかり。時代の流れを思わせて哀愁が漂う。

今日涼しポイント溜めるチャンスなり

友と連れだち九千歩越す 酒向陸江☆

今年の夏はとても暑かったが、まれに涼しい朝があつたのかもしれない。チャンス到来で友と九千歩もウォーキング。歩くことでポイントが溜まるのも嬉しいことだ。弾むような歌の調べである。

表から裏へと空氣動き出し普段使はぬ部屋生き返る 高橋説子

早朝、家の窓を全て開けて風を通す。表から裏へと風の道が出来る。それを「空氣動き出し」と捉えており、下句は意外なところに目が向けられている。その部屋を使っていた過去の日々。「部屋生き返る」は巧みな表現である。

町内のをばさんたちの口コミに姉の編み物注文しきり 大塚亮子

過去回想の歌だが現在形で詠まれている澁刺とした雰囲気がある。編み物を仕

九月集／残響集評

鈴木やよい

朝どりの胡瓜に塩振りばきばきとこの年の味を独りたのしむ 児玉孝子☆

今年初めて収穫した胡瓜のようだ。採りたてをまずは味見と食べる作者。「ばきばき」という音がいい。塩味のきいた新鮮な胡瓜はそれだけでおいしい。

この景色いつまで残るこの里に螢はふつと吾の手飛び立つ 川上美智子☆

ゆったりと点滅する螢の光に強く惹かれる。去年たくさん見かけた場所に今年も行ったが、わずかしかなかった。護岸工事が影響したのかも知れない。作者が見ている螢の景色がいつまでも残って欲しい。

鯛めしと栗きんとんを鮮やかに今年も染めよ庭の梔子 藤田夏見☆

クチナシは昔から染料や料理の色付けに使われている。作者も庭で育てたクチナシの実を毎年鯛めしや栗きんとんに使うようだ。自然の恵みを生活に生かして

楽しんでる姿に感心する。

思慕と言ふ花言葉持つ振花の紅の螺旋の先の危ふさ 小林貞子

下からねじれるように咲く振花は、上に向かってだんだん小さくなっていく。その先端の様子を危ういと捉える感じが新鮮だ。

菅笠の夫は青田の真中にて点になりある炎天の下 佐藤幸子

炎天に田んぼが青々と広がり、点に見えるほど遠くに菅笠で作業する人がいる。強い日差しや、むっとした熱氣、広々とした青田などのイメージが湧き上がってくる。

真ん中をショベルのごとく掘り握る幼の手には白き食パン 藤田英輔☆

幼い子が食パンに手を突っ込んで中身をぐにゅっと取り出した。「いけません」と言われそう。でも幼児はこうしているんだことを奔放に試して、その感覚を身につけていくのだらう。

コロナ禍のゆり園閉鎖に配られし球根家々にいまも咲きつぐ 井上鈴子

事とされた姉君。上手に編むので評判も良かったのだらう。「口コミ」は現代ではネットなどでよく目にする言葉だが、実は一九六〇年くらいから使われていたそう。人に喜ばれる仕事をしていた姉君への尊敬と誇らしい氣持が出た作品。公園に遊具ながめて出産に娘の帰りくる日をかぞふ 橘 美千代

新しい命を宿した娘さんがいよいよ里帰りして出産する。公園の遊具に自然に目が止まるのもお孫さんに対面できる日を心待ちにしているからだと思う。未来への希望が満ちている。

発車せぬ地下鉄結局一時間動かず読書思はず進む 中村哲也

利用した地下鉄に故障が発生し、そのままストップ。運転再開までの待ち時間を読書時間と頭を切り替えた。「発車せぬ」と「動かず」は言葉が重なるのでご一考を。交通トラブルに巻き込まれたが「読書思はず進む」という良い事もあった。こんな時にも焦らずに状況を見るという心のゆとりが作品の背後にある。

コロナで大へんだった時期を思い出す。閉鎖になってしまったゆり園ではあるが、球根が家庭に配られたとか。今も家々で咲いているのはうれしい。

山峡の温泉に入り里人を真似て寝ころぶ気安さのよし 佐々木政子

山峡の温泉に行ったようだ。ひなびた温泉であらう。ゆったりと流れる時間だ。里人に親しさを感じながら同じように楽しんでいる。

難解な問題解いてみたやうな子育てのころいま解き放されつ 長谷川 剛

これでよいのかと悩み乍ら向合うのが子育てかも知れない。ようやく解放されたようであるが、この歌には「さあこれから」という作者の意気込みも見える。驚くはこの生姜まで高くなりほんの数

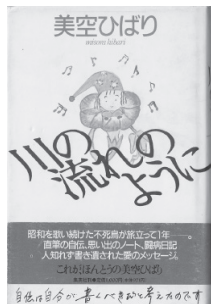
ミリ惜しみつつ切る 首藤文江☆

近頃は何かかも値上がりしている。この物価高に生姜の値段まで上がったと驚く作者。何とか節約して乗り切ろうとしているようだ。「ほんの数ミリ惜しみつつ切る」と節約の努力が具体的だ。

大友柳太朗と美空ひばり⑥

—その短歌と情—

大山敏夫



『川の流れのように』
(1990年集英社刊)表紙

一九八九年一月八日、元号が昭和から平成に変わったその日に、美空ひばりから次のメッセージが出た。

平成の我新海に流れつき命の歌よ穏やかに：

このメッセージを引用する時、「短歌」とよぶ人が多い。直後にあの有名な曲の「川の流れのように」がリリースされるのだから、このメッセージはそんな流れの中で前触লের意味があった。

皆様、時代は平成になりました。平成という元号にふさわしいような、私の新しい海が開け、そこに私の命の歌が流れついたのです。私の歌一筋の長い川の流れ。その名の通りに穏やかな海であってほしいですね。

というような意味か。美空ひばりは「川の流れのように」という曲に自分の来し方を重ね、賭けるものが多くあった。大

付けるというのを美空ひばりは好んでいたと伝えられるから、ここには省略のない文末認識が作者にあった。

麦畑から、ひばりが一羽翔び立って（それは私よ、汲み取ってね）、その鳥を撃ってはだめよ、村の皆様。優しく見守っててくださいね。

となろう。結句を「村人たちよ」とでもすれば短歌となるが、肉声メッセージを添えての必死の復活アピールだろう。その熱意虚しく六月二十四日に息絶える。こういう背景から美空ひばりの命日を「麦の日」と称するようになったという。

その命の燃え尽きる直前に二度に渡り美空ひばりの発信したメッセージを短歌だと捉えて、美空ひばりが折に触れて短歌を詠んだという話は、それを広めたのが短歌を専門としないう他のジャンルの人たちなので、この勘違いはやむを得ないところだが、二つのメッセージは短歌ではない。たぶん鉢から染み出した邦楽（小唄等）の調べに乗せて思いのたけを綴ったのかと思う。詩句を数えてみよう。

△平成の我新海に流れつき命の歌よ穏やかに：▽
これは575755となっている。

△麦畑ひばりが一羽飛び立ちて：その鳥撃つな村人よ！▽
これも575755で同じ。

思い出しちゃいたい。本稿⑤で書いた端唄の中にはこれと同じような調べのものがかなりあったはずだ。「春雨」に

腿骨頭壊死症候群という病状で歩行もままならず、辛く苦しい間質性肺炎とも闘っていた。

結句5音には「：」（三ポイントリーダー）という記号が付いている。この部分には省略する言葉があるので汲み取ってほしいという意味。この記号に変えて、例えば「あれ」とかを添え「穏やかにあれ」なら、短歌と言えるかもしれない。或いは作者が短歌だと言って示せば短歌である。尚これはその墓所にも短歌の碑として刻まれ建っているという。だが美空ひばり自身は、これを短歌だと言っていたわけではない。

既述のことだが、この年は美空ひばりの五十二歳にあたり、約半年後に惜しまれつつ亡くなってしまふのだ。その少し前の五月二十七日に再び同じ形式のメッセージが出た。生まれ育った地の横浜で予定されていたステージへの並々ならぬ意欲を示し、ひたすら闘っていた最中であつた。

麦畑ひばりが一羽飛び立ちて：その鳥撃つな村人よ！

「私自身の命ですから、私の中に一つでも悩みを引きずって歩んでいく訳には参りませんので、後悔のないように完璧に人生のこの道を歩みたいと願っているこの頃です」などと録音した肉声テープと一緒に披露している。これについても前と同様に多くの人は「短歌を詠んだ」と言う。何故かこちらも結句が5音で、上の句の方に記号「：」を付け、結句5音には「！」（雨垂れ）記号を付けている。文末に「！」を

しても、575755と歌い出しているではないか。「縁かいな」の方も出だしは7音ながら、そこに繋がるのは575755となっている。結句を5音で締める75調という共通点があるのだから、小唄的と見る方が近い。

話を少し戻すが、美空ひばりが一九八七年に福岡のリサیتال会場で倒れたのは「大腿骨頭壊死症候群」によるものであった。その兆候はその前年（昭和61年5月）に行われた第七回誕生日記念ゴルフコンペ開催中のゴルフ場で突然脚がつって歩けなくなるといふ症状で始まった。ゴルフ場では「ハンサムに囲まれて頑張りすぎて脚を痛めてしまった」と冗談めいて語ったのであるが、福岡での入院はそんな軽口ではすまなかった。レントゲン写真を観たという医師によると、かなり進行した状態で自分の骨での手術（骨切り術）は困難な状況であった。人工関節置換術がふさわしいと思われたが、何しろ肝機能が悪く手術できる状態ではなかった。

という。肝機能が平常なら対応はあったようだが断念、対外的には肝硬変より程度を下げて「慢性肝炎」と発表され、そのまま様子を見る診断がくだった。様子を見ると言っても、肝臓のダメージはかなりで症状が好転する見込みは薄い。

「大腿骨頭壊死症の原因はステロイドホルモンが3分の1、飲酒が3分の1、原因不明が3分の1である。日本酒なら1

日3合以上、ビールなら大瓶2本を飲み続けると、飲酒歴のない人の10倍以上、大腿骨頭壊死症になり易い」とされている。しかし大腿骨頭壊死症で命を落とすことは無い。美空ひばりの死因とされたのは同じく大飲酒がまねく間質性肺炎なのである。亡くなった年の一月四日にテレビで放映された生涯最後のワンマンショーの収録後に、

私ねえ、見た目よりもうんと疲れてるのよ、一曲終わる度にガクッと来るの…

と漏らしたという。まさに命を削りながら歌っていた。

一日にブランデー一本半の他、焼酎など大量を、毎日夜明け頃まで浴びるように飲んでいた時期があったというからアルコール依存症だろう。これでは躰がもたない。

その死後に出版されることになった、直筆自伝『川の流れるように』（一九九〇年五月 集英社刊）には、幾度も書き直された跡を残し「序」も「あとがき」も付いている。回復を信じ復帰へ向けて懸命に療養生活を送る辛いベッドの上で、ずっと書いては直し書いては削り、内容を更新し遺しておいたものだった。

小誌八月号の新井光雄氏の一連「ひばり讃歌」には、

○子供の頃ひばりを唄えば明治の母「不良になります」『下品ですよ』と

○わが友はひばり唄えば父親が教師のゆえかビンタを食らう

苦々しい大人の世界への気持、母の思い出。直筆自伝と言ってもとてもあっさりとは簡潔で長い歳月がほとんど通過してゆく感じ。鶴田浩二との共演「あの丘越えて」（一九五一年松竹瑞穂春海監督）のこと。映画の終わりの方で、湖に入って自殺しようとするシーンがあり、それを救った鶴田の膝の上に抱き抱えられ濡れた髪を優しく撫でられる時には、胸がドキドキして困ったと言い、初恋だったのかしらと述べる（後年鶴田とは、幾度か恋愛関係の設定で共演している）。

そういう内容なのだが、終わり近くになって名前をあげて五人の思い出が温かい筆致で書き残される。力道山、中村錦之助、大川橋蔵、江利チエミまでは予想される名だが、何とその中に大友柳太朗が入っていた。全文次に紹介したい。

たくさんの、数え切れないほどの相手役。その巡り合いの中でも、特に印象深い……というより、他の人とはひと味違った面白い方と申し上げたほうがいいかもね……。その方の名は大友柳太朗さんです。

共演は決して多くはないのですが、その数少ない私との映画のお話をひとくさり……。

ある映画の中の一シーンに、大友さんとのラブシーンがあったのです。ご本人は前日から、ずいぶん気をつかっていらしたらしいのですが、当時の東映社長、故大川博さんは、

「ひばりにラブシーンなどんでもない！ カットしな

○高校で部活の後でわが友がひばり唄って教師のゲンコツという歌がある。子供時代の美空ひばりに吹き荒れた逆風の凄さが分かる一連だ。ひばりの歌を唄えば、父親がその子にビンタ喰らわす、教師が生徒にゲンコツを見舞うほど、ひばりの唄う歌、その存在は嫌悪され否定された。逆に言えば、それでも当時の少年少女達はひばりの歌を唄ったことになる。このことについては、直筆自伝でも触れられている。

小学校時代はいろいろ辛いこともありました。

「子供が大人の歌を歌うなんて」と、先生方もあまり良い感情は持っていなかったようです。それに学校へ行ける時間もなくなり、成績は落ちる一方。行ける回数があれば、私だってもっとイイ線いってたのに。

義務教育である学校へ行かせずに唄わせるというのが一番に問題視されていた。ちょうどこの時期は、戦前の古い制度から戦後の新しい学校制度への切り替えの時に当たっており、それに反するような事例は許しがたかったという文部省側の立場もあったのだ。プラスして年端の行かない子供が大人の恋愛の情などを唄うはもってのほかとなったのだろう。美空ひばりが一番辛かったのは小学校の卒業に当たったの難問だった。卒業させないと言う学校側と、粘り強く話し合い、特別対応の追加授業を追試を受けるということでひばり側はやっとクリアした。

父の思い出、デビュー以前、以後の子供だった頃の辛い、

さい！」

この鶴の一声でそのシーンは当日になってカット。けれどもそうと知らない大友さんは、私のそばにいらしてこうおっしゃいました。

「ひばりさん、私は昨日から臭いものは一切食べておりませんし、歯もきれいに磨いてきましたので」

この御丁寧なお言葉に、私は何とお返事してよいかわかりませんでした。

その後、撮影がすべて終わって楽屋に帰ると、大友さんからお花が届いていました。

「これを私と思って飾って下さい」との伝言もあり、私は早速、その花の名前を調べさせましたところ、何とこの花、「ほけの花」というのだそうです。

うそー！ ほんと？

この時点で三十年近く経っている思い出なのに、強烈なインパクトだったことが想像できる。この結びで発した言葉の意味はなんだったのだろうか。ボケの花言葉、その贈られるケースなどお互いに知っていたのだろうか。この一件では、軽からぬ敬意と好意を美空ひばりに抱いていた大友柳太朗が知れる。思うに、この花は花束等の大袈裟な物でなく、撮影所の片隅に咲いていたものを幾つか手折り軽く束ね、届けたのでろう。そのほうが粹で洒落ている。

作品一

桜井 美保子 神奈川

人参を細く刻みて生のままサラダにすれば固さ気になる
さつと湯がけば口当たりがよかつたか食事作りも奥深くして
不具合の多きスマホを乗り換へるシンプル画面の機種を選んで
バスに乗りマナーモードに切りかへて戻すを忘れることもしばしば
映画館出でてゆると日常に戻りゆく地下の食品売場
昼の弁当二つ買ひ電車に乗り込みぬ朝からの洋画一本見終へて
映画見るに連れは要らない数時間坐りたるまま旅の心地に
一年に幾つかの映画見る楽しみそれくらゐは続けてゆかむ

正田 フミエ☆ 栃木

盆に集う子や孫ひ孫に囲まれて高松ヒサ氏自宅にて逝きぬ
孫ひ孫に最期の姿見せられて高松ヒサ氏九十八歳
矢島さん亡き後支部長続けられ子の妻と共に楽しい集いを
長時間保冷キープを背に胸下に収納ベスト畑にと買う
繰り返し凍らせ使う保冷キープのベスト着て行く朝の畑に
玄関に氷水作り置いて出づ畑帰りはゴクゴクと飲む

ササゲ苗遮光ネットかけたれば高音なれど本葉五枚に
夕方になれど畑は三十五度ササゲ苗植える工夫試す時

飯塚 澄子 東京

八月の都連吟詠研修会午前五十人吟詠発表

我が会は五人出吟教へ子も李白の吟を堂々と吟ず
わが会の出吟者の写真撮り記念に送る各会の主に
午後は詩吟の勉強会あり和歌「向日葵」と律詩の音読
亀有の駅の近くでバレエの会曾孫の発表同じ日の五時
三人でメヌエツ踊る舞台なり小学五年華やかな踊り
くるみ割り人形二幕二十四人最後の舞台に拍手喝采
祖父母と孫我と四人で会食後タクシーに乗り家路楽しむ

斉藤 トミ子☆ 栃木

日光に来れば挨拶は「涼しいですね」猛暑日続く佐野市逃れて
中禅寺湖見下ろして立つ山頂に秋茜群れ帽子に背に
標高は千二百余の中禅寺湖スワンボート汗かきて漕ぐ
長ながと車道に腹這う大蛇蛇我が近づけば跳ねて逃げたり
下山後の平な道で転びたり擦り傷あれど骨折はせず
良かったよ雨が降ってと翁笑む足取り軽く稲田見回る
希釈濃度三倍にして散布せり勢う草に容赦なく撒く
暑き日日田んぼの稲の元気なく畦の荒草だけは生き生き

暑さはまだまだなのにもう立秋果たして今年は秋があるのか
夏と冬二季になりたるこの頃は一年通して着ない服あり
バス停で隣りは我より年長者おしゃれなんだな青のペディキュア
極細のさんまに見慣れ久々の太き秋刀魚はふっくら美味なり
終戦から八十年経て戦争を振り返る記事多く目にする
核兵器は瞬時の被曝のみならず子孫に長く続くものなり
人間の愚かさを知る核保有相互被害を分かりて尚持つ
ロシアとウクライナの停戦は互いの言い分食い違うばかり

盆中に七人來たる姪一家新婚さんの花婿つれて
わが市に終に出でたる合葬墓世の流れをば逆らへずかな
能登地震三万三千棟が倒壊すいまだに残るその凄まじさ
倒壊したる家に見つかる品のなか千人針に武運長久
戦時中武運長久祈りつつ戦争に送らるる若人あまた
思ひ出す國民学校の三年生戦地に送りし慰問の手紙
わが市のデイケアに行く道すがら立派な空家に良き策なきや
現世は不審電話が花ざかり戦争なけれど数多の誘惑

表紙絵の「さくら」にいつか親しみてわたしも昔描きし記憶

盆棚を調うたるも昨年の如くは及ばずつくづく見てる
盆仕舞の最後の客の帰りゆき緩りと坐るテレビの前へ
重厚なる演技とさらに持ち味のコミカル添わる森繁さんのドラマ（森繁久弥さん）
記憶無き父を何処とはなく重ね観る森繁さんの昭和の家庭
客用の布団の奥に手応えのあんばんマンのイラスト入り枕
長男の生日年製のあんばんマン枕に往時を追懐したり

かく乱に日射病に熱中症病名かはる時代と共に
川越の時の鐘が鳴る鎮魂のけふ原爆忌黙たうをする
三男は黄泉の国へと旅立ちぬ五十一歳ああ早すぎる
妹らと母の命日墓参の予定あつさ極まり日延とするなり
どこ迄も高く真青な夏空に綿菓子のような雲漂ひゐて
昼下がり暑さ極まる公園に遊具のパンダ子等をまちをり
寺庭から元気な掛け声聞えくるラジオ体操参加の人の

仏間前の赤松ともみじ大木となりてこの夏木陰涼しも
赤松ともみじが作る半日陰物干しに良しこの酷暑には
取り込める濯ぎ物畳む正座して仏間に掛かる写真を見つつ
風吹けば用水添いの遊歩道の百日紅が一斉に散る
百日紅の紅い花びら水面を走るお祭りにでも行く騒ぎして

バジルの葉を山ほども摘み二日かけバジルソース作る香に浸りつつ
リラックス、ビタミン、ミネラル、抗菌作用バジルの効用夏負けに良し
残暑にも我が家の食を支えくるる茄子、オクラなどに励まされおり

矢野 操☆ 香川

ブルドッグ児童期のあだ名かわいいに縁遠く鏡あまりみつめず

仲の良い歌友二人の一方がほめられてると他方しょげてる

幼稚園の先生の母おゆうぎ会近づけば家事をしながらよく歌ってる

松中 賀代☆ 高知

降りしきる雨の中でも熱い汗踊るも観るも鳴子は止まず

八月は土佐のよさこいヨッチョレよ鳴子の音が街を揺るがす

荒草の中に緑の葉を保ちかすかに匂う青紫蘇の葉よ

この頃はいいやいや歩く子犬なみ娘の後を必死に歩く

友も老い交わす電話が唯一の安否確認転ばないでね

無人駅の四方の窓は開け放ち暑さを凌ぐ団扇が一つ

受け付けにマイナンバーカード使うのは初めての事娘の手を借りぬ

鈴木 やよい 東京

スマホ持つ腕に寄りきて刺す蚊にも耐へて撮りある烏瓜の花

闇に浮かぶ仄かな白は不思議なるレースを纏ふ烏瓜の花

目の奥の冴えて眠れぬ夏の夜に暗がり見つめてふくらはぎ揉む

暑さ続き頼みのクーラー古ければ苦しさうなる音の気になる

今日の土手少し嬉しく歩みある干上がる川に水音戻れば

荷物下げ疲れて降りたる駅前にお囃子響き阿波踊り進む

人垣に覗く踊り手は腰低く笑顔向けくる疲れた吾にも

本郷 歌子☆ 栃木

大空に向いて素肌曝しおり露天風呂に蝉の声降る

山の端を橙色に染め上げて落ちゆく太陽明日も猛暑か

それぞれの人がそれぞれの犬連れて朝六時の公園日差しの淡し

手の平に伝わる猛暑取り入れた洗濯物は熱を帯びたり

炎天下日陰を持ちて行く我の日傘の内に風の吹きくる

刺さりくる直射日光に耐えきれず店に逃げこむ五分も歩かず

猛暑日は団扇の風さえ熱を持つ佐野の暑さは栃木県一

村上 美江 岩手

初盆に親戚廻ればその家の「赤紫蘇ソーダ」も家なりの味

缶詰の果物三種ちりばめて『赤いゼリー』は宝石のやう

こんなにも過酷な夏は無かりけり取つても取つても身は水求む

遂に来た四十度越える気温なり命に関はる「災害級の猛暑」

仏壇の前に座敷用椅子を置き仏に唱へる「般若心経」

ありがたや紺紙に金泥美しく「般若心経」軸の届いて

歌の友に心の底より頼み込む貴女の文字が是非とも見たくて

朝ごとに「般若心経」唱へれば心安らか清しく軽し

伊 澤 直 子 ☆ 東京

猛暑から逃れようとて山中湖へ新宿バスタから直通で行く
空高く黒き夏富士くつきりと力強い姿見せたり
山中湖「かば」という水陸両用車湖水に入る時しぶきを上げる
忍野八海多くの人の行き交いて以前のようなのどかさはなく
立秋を過ぎて猛暑の続く夏ツクツクホウシは盛んに鳴けり
陽光は部屋の縁より昇り来て暑さに上乘せ温度計見る
予報では夕立あるを期待させ今日も空振り水まきをする
薄くれないに花広げたる百日紅夏の庭に華やかさくれる

乾 義 江 ☆ 茨城

猛暑のなかひからびた庭に寂として深紅のバラの一輪咲きおり
日もすがら灼熱の太陽降り注ぐ時々蛇口から熱湯出で来
年間の小中高の自殺者数20万人からとふ衝撃うける
頂きしコキア3本成長す待ち遠しきかな色彩の変化
夏休み子供の賑わう待合室耳鼻科に行けば40番目
関西ですかと問えばおどけテレビにて人気の耳鼻科乾院長
テレビに出て悠然と構え話しおり孫の成長に胸を打たれる
海上を走る台風に待望の束の間の雨嬉しくなりぬ

永 光 徳 子 ☆ 東京

突然の雷雨おさまり涼風に虫の音もして耳を疑う

夕焼けはちぎれた雲を赤く染め多摩の山並み鮮明に見ゆ

ニュースにて吉行和子氏の訃報知り幾多の映像胸に浮かびぬ
静かなる物言いなれど奥深く映画もテレビもエッセイも好き
バス停に立つ目の前を処分せし車と同車種通れば目に追う
運転辞め足が頼りの現状に足を骨折何の因果か
一年に二度も骨折した吾をガンバガンバと友はラインで

行く多摩川 松 本 英 夫 東京

平日のダイヤなれども盆さなか若者おほき青梅線ゆく
沢井駅坂を下れば山青く木木の葉そよぎ多摩川のどやか
空青く多摩川流るるV字溪なつの緑のなだりに深し
窓からは行く多摩川と葉のそよぎ食みつつ笑まふしばしわれらは
子供らは木漏れ日を背に多摩川をゆるゆる下るゴムのボートに
力込め寒山寺の鐘つきたれば音は広がりて多摩川上ゆく
十年前御岳山へ登り見しレンジョウマの店先に白し
中央線吉祥寺に降り神戸屋へ菓子パンセットは売り切れてをり

稲 津 孝 子 福岡

我家より車体の見ゆる郊外電車の朝より音なし信号故障や
雨の音の聞こえず庭に来る鳥の姿きこえず八十一歳
報道の番組ばかり父のを見ると不満に思ひてをりにき幼女
あと一歩と娘に夫の言ひてゐき五十四歳に娘のなりつ

庭の木に熟る枇杷の實より赤き蟲いできつ枇杷を食ふ蟲
タイマーの鳴りたり何のタイマーやコンロにかくるおでんの火を消す
まかしときと夫は言ひてくれたりきその時夫に任せしは何
桜蔭学園女学校に学びたる孫が花の刺繍の鍋敷くれつ

戸部田 とくえ 福岡

板の間に昼寝の母うかぶ明治大正昭和を生きて
貰ひきて七日目われは信じられて水面に集ひ餌を待つ目高
秋を待つ思ひ日毎ましてきて風のそよぎに一喜一憂せり
庭の木の雀蜂の巣を駆除して安堵してをり完成間近の
見るほどに雀蜂の巣の緻密さを機織りとみまがふほどの
庭に鳴く法師蟬のこゑ限りなくき惚れてをり慈しみこめて
此のところ日ごと落ちくる庭の柿あかね色の惜しまる実の
妖怪の世界に魅せられ「水木しげる」偲びつつそのお人柄うやまう

大塚 照美 兵庫

照りかげるも暑さの引かぬこの夕べ「雨だ」と聲いづ庇うつ音
重き荷を杖にて支へ見事なる駅のピアノ聴くショパンの幾曲
こころ満ちて鼻歌まじりに帰る道「もしもピアノが弾けたなら」などと
ハウストマトのシーズン終へて帰省せる次男は草を引き網戸を張り替ふ
クロスワード・パズルの一つ解けぬまま窓の夕日落つわれを尻目に
鳴き急ぐかに思はるる裏山の蝉のかしまし秋たち初めて

高校生球児にエールを送るごとVサインの形の雲みゆ甲子園の上（準決勝戦）
寺庭の一樹にもどる雀らは揃へば向かふおのが畴へ

三好 規子 福岡

里の家の直系の甥に父の歌の軸と風炉先屏風を送り安堵す
この夏は鳴き声まだと思ひをれば四階の網戸に縋る初蟬
娘より薄き箱とどき紫と白の釣鐘草の幾つ収まる
釣鐘草風鈴草と称する花よわ弱しけれど長く持ちたり
娘より日に幾たびもラインあり何でも無きことやり取りしをり
「神」の軸に笛の花入れ神輿香合太鼓蓋置の夏の茶を為しき
京都より福岡へ孫は日歸りにて会ひに来て呉るカナダへ発つ前
歌どちの孫さんと同じトロント大に交換留学のまご奨学金うけて

須藤 紀子 埼玉

炎熱と日照りに育つ菜もなく農の人らは籠り居るらし
灼熱の夏移りゆく気配して月桂樹の若葉今伸び始む
夜昼を分かつ鳴ける不如帰いつか途絶えて杜鵑草咲く
ガラス戸に触れる手のひら温かく夏の日差しの衰ふを知る
夏から秋へ変はる気配の雲の下片羽切れたる揚羽地にあり
擦り切れた襟に布当て繕ひてまだ着続けむ好きな服ゆゑ
遅しき背に尾を立てて行く犬と飼ひ主もまた誇らしげに見ゆ
犬の声したと思ひて手を止めるもう居ない部屋に見には行かねど

佐藤靖子 東京

花殻をつみゐる人がいつになく無欲のやうなやさしさを見す
ひまはりに添へある栗の穂の稔けむしそつくり飾る気の失す
蔭の道つくるもみぢにけれなゐのプロペラさはにみのる平和さ
よるべなき朝顔のつる水平になびきをりつつ上を向く先端
目が合へば用ふゆるゆゑわれを見る猫を無視する近寄らずゐる
馬の目のほがらかならず見ながらにうつろにぞ見ゆめうまクララを
白髪葱天かすそして胡麻汚しあたまのなかで言ひかへてゐる
「百試千改」モットーとするもみじ鰻頭この土産にて認識かはる

齋鹿 ミヤコ 神奈川

顔会へば体調のこと庭のことお隣さんと話の続く
通るたび庭の水遣りするひとに白く咲きたる花の名訊きつ
夫亡きあとの一人の暮らしと言ふご近所なれど初対面なり
ご近所の初対面のかたと語り合ふ庭の手入れやからだのことを
ご近所に知り合ひ一人増えたりと散歩のときのことを伝へぬ
十五号冷たき空気と暗き空ときに激しき雨となりたり
暗き雲去りて夕べの西の空明るくなりぬ散歩のころは
やうやくに辞めると言へる首相なりその後の政権なほも気掛かり
夕陽背に長き列成し花火大会の太分河畔に急ぐ人びと

江藤 ひさ子 太分

花火揚げる位置移動して観覧の場所も去年とは異なる当然
打ち上げる花火見上げる河川敷座るも立つも満席の様
末つ子の甘えん坊とて吾の性九十四歳の未だをりをり
吾の為すすべてを許容してくれる夫に唯ただ感謝する日々
唐突に群れ飛ぶとんぼ午後の庭に縦横無尽といふがの暫し
葦の花真白く群れて咲く側を紋白蝶が舞ひ舞ふしばし
何や彼や劣化の一途その速度思へど已む無し九十四歳

鈴木 計子 東京

大谷にチャンネルあはせ見てをりぬ野球に興味もたざる夫が
ホームランは無論よけれど盗塁のフォーム美し大谷選手は
乗り換へに行きかふ道に日差し避け傘の波の続くこの夏
暑さにて籠もる障子に映りある軽やかなる蝶羨しと見をり
エアコンを使はず過ごせる夜ありて窓の風受け眠る幸せ
いつまでも屋根の辺りに鳴く雀なにしてゐるのか姿の見えず
あんぱんに牛乳があふと歌ひにし人の消息令和後知らず
照明にまぶしく光る新さんまああ綺麗とて眺めて過ぎぬ

石渡 静夫 茨城

台風の去りて田の稲ことごとく北に倒さる波濤のやうに
休耕の田に大量の碎石がならされてあり家の建つらし
重陽の節句にいつも届く栗今年は来ぬと家族で話す

午前九時チャイムが鳴りて応対す栗届きたり一日遅れで
猛暑にて作柄悪いと手紙あり箱にぎつしり大粒の栗

十四年暮した町の中心部シンボルタワーを眩しく見上ぐ（水戸芸術館）
大通の老舗のデパート今は無く市民会館の透明感よ（水戸市民会館）
入選の句を選者が読上げるその度起る感嘆の声（水戸市川柳大会）

西村 邦子 兵庫

かくれんぼ孫に話せる幼き日かくれ場所を指さしながら
孫の言ふ「去年も聞いたよ、その話」蟬の声が響く境内
太陽の光を浴びて変はりゆくブルーベリーは青紫色に
日本館日本らしさのもののづくり「循環」をめぐる展示と建築
館内の中心吹き抜け大空を映せる水はごみから浄化

この夏の万博を歌に残したり来館記念のスタンプと共に
万博を通して分かりたる自分のことまだ残りゐる体力気力

高橋 燿子 ☆ 埼玉

汗流すシャワーに秋の虫の音がかすかに聞こえる白露を過ぎて
稲荷ずし初どり胡瓜を供えたり十二に逝きたる孫の命日
心根の余りに優し男孫前触れなしに逝く救急の日
二十余年過ぎたるも澄んだ目をした孫の顔が眼裏にあり
長年のデフレ経済今物価高みんな頑張れ日本頑張れ
待ち望む雨が災害もたらして加減忘れたか自然も人も

連れ立ちて兄を見舞えば不自由な言葉で近状懸命に話す
長男は何でもしたと遠くを見る泣き虫吾を背負いし事かも

野崎 礼子 ☆ 埼玉

夕映えの路地に夢追うあの日々は貧しくあれど心は満ちたり
手のひらに刻む十字の印あり幸運を呼ぶと今も信じたり
風と雨揺るる空より翔るつばめ縦横無尽に光を裂きて
虫食いの葉に密やかに命あり甘きキャベツに土の香もして
ニュースとは信じぬものと割り切って情報だけをそと拾いぬ
スマホへと予定を重ねてゆくごとに今日の私が輪郭を持つ
足裏の違和感さえも加齢です半日待つて軽く言われし
口癖は何とかなると笑む友の瞳の奥に夏空映りて

飯嶋 久子 ☆ 茨城

半年の治療空しく逝きにけり白き車ホーン鳴らし去る
優しかりし姉娘の夫六十四歳研究半ば心残して
つれ立ちてハワイへ遊ぼんのプランあり旅の冊子棺に収める
二人の出会いコース部ノートルダムに口ずさみし事ありと
妹の病院への送迎をたのみし事など切なく思う

「お義兄さん私は元氣になりました安心して」と妹は告ぐ
この折に私は背骨骨折と固きコルセット上半身おおう
共に住む末娘の復職決定すこの頃唯一嬉しきニュース

九月号作品一評

小林 芳枝

二人とも元気でゐてくれてありがたう
短きメール子から届きぬ 桜井美保子
改めて言われることは余りないかもし
れないが嬉しいメールである。子供も今
では立派な大人になっているのだ。

青空と白雲映す早苗田に波紋広げて蛇
泳ぎ来る 斉藤トミ子☆

移植されたばかりの稲の柔らかな葉が
水に浸かっている水田に波紋を広げて進
むのは蛇、穏やかな風景の中での緊張感
が結句「来る」に表現されている。

梅雨ざむと言ふ状態はどこへやら雨は
少なく暑さいやます 倉浪ゆみ

青葉の季節の後にくる筈の長い梅雨が
なくていきなり真夏の陽射しに見舞われ
た事が今年の異常な夏の始めだった。意
外な暑さに誰もが戸惑っていた。

大和撫子は勝たねばならぬ戦争に敵は
荒草カメムシに蚊 本郷歌子☆
猛暑の中での草取りや虫退治に奮闘す

自分を励ますような初句の勢いの良さ
は快いけれど「戦争」は少しオーバーか
も「この夏の」位ではどうだろう。

冷房の涼しさ覚えコタローは自らケー
ジに嫌がらず入る 村上美江

何時も元気に庭を走り回っているコタ
ロー君も今年の暑さは辛かったのだろ
う。心地好い場所を自然に感知している。

真夏日を百日も咲く百日草豪雨に倒さ
れ尚咲きつづく 永光徳子☆

「百日草が毎年自然に咲くのですよ」
と言っていた友の庭や幼い日の祖母の庭
を思い出す。百日草の強さに作者も励ま
されているようだ。

羽化したる揚羽は蛹につかまりため
らふごとく羽を振りをり 須藤紀子

成虫になったばかりの揚羽蝶は新しい
世界に戸惑っているのだろう。写実的確
かさど四句の「ためらふごとく」が調和
して心の温まる作品となった。

あらくさを刈りたる塀に土蜘蛛の巢の
ふくらみてあまた立ちをり 佐藤靖子
子供の頃によく目にした土蜘蛛は中に

九月号作品一評

藤田 夏見

大き木を定家葛は覆いたり何の木なの
か分からぬ程に 斉藤トミ子☆

定家葛はハツユキカズラに似た植物な
のですね。それに覆われてしまった大き
な木は何の木なのか分からぬ程。葛に覆
われた美しい様子に見入りながら、その
下の木を知っている作者なのでしょう。

誌上からの記憶せし名が湧きくれば初
対面とは思えぬ心地 倉浪ゆみ

歌会に集う歌友。毎月の冬雷誌に親し
んだ名前であれば、初対面の人に親しみ
は倍増。年一度の冬雷大会でも同じ場面
にあります。

鳥たちと取り合いをした枇杷の実も終
わりて葉を摘み枇杷の葉茶飲む 林 美智子☆

枇杷の熟れ具合に鳥も大層喜んでし
ようね。枇杷の葉茶を楽しまれる作者。
枇杷は大葉王樹と言われる程の優れた葉
効があると伝えられている。筆者は枇杷

の実と葉っぱも焼酎につけます。

吊るしたる喪服はタンスに仕舞へずに
葬儀の知らせ次々届く 村上美江

2025年問題を言われているわけでは
ないが、作者と同様に知人の亡くなら
れた知らせが本当に次々、と届きます。
喪服の歌は寂しい。

新緑を漏るる日を浴び鶯を聴きつつ露
天の湯に足のぼす 三好規子

はつ夏の頃の降るような新緑の中に鶯
の囀りを聴いている。ゆっくりとすぎる
時間を湯に伸びのびとしている作者。今
は施設に迎えに来た家族と外出の時間。

歳時記を抱へて眠る猫の背の斜面にプ
ラシをすべらかに当つ 佐藤靖子

歳時記を抱えて眠る猫。その背中の斜
面の形にプラシをかけている作者。短歌
愛好家の猫好きにはたまらない描写。
心地よさに狸寝入りした眠り猫か。

どの花もほかよりいつも遅れ咲く南隣
りに家建ち二十年 鈴木 計子

南隣りに家が建ち日陰となった庭で育
てている花。ご近所さんより遅れて咲く

何かが動いていたが取ってはいけないと
言われた記憶がある。土蜘蛛はハエやゴ
キブリを食べる益虫だったようだ。下句
には巢の状態で端的に表現されている。
現在でもそっとしておくのだろうか。

多宝塔の屋根は大きく反り返り後ろに
迫る筑波山系 石渡静夫

紫陽花の美しい雨引観音を詠んだ連作
の一首。多宝塔の屋根を仰ぎ背景の筑波
の山並を力強く詠まれて迫力がある。

手伝いの夫が黄な粉を振りかけておは
ぎを作る義母の命日 高橋燿子☆

好物だったおはぎを毎年作って来られ
たのだろう。お二人の協力で作った今年
のおはぎは格別美味しくできたのだろう
と思いつながら心が温かくなる。

暑ささけ体力保持のウォーキングたそ
がれ近き田の道歩む 飯嶋久子☆

街中は夕方になっても暑さが籠ってい
るけれど周りが田圃という道は涼しくな
るのだろう。ウォーキングは三十分程の
ようだが長く続けているようで素晴し
い。

とちよつと残念な思いの歌。二十年の間
しっかりと肥料をやり適切な仕事のされ
た土に苗木は枝葉も活気に満ち根の張り
も充分なのでしよう。ヒヨロヒヨロの苗
木には早く花が咲き早く終わるのです。
夕方の店先に並ぶ南高梅黄色く色づき
半額シール 西村邦子

夕刻の店先で見つけた程よく熟した南
高梅は半額シールが貼られている。迷わ
ず購入されて嬉しい梅仕事。

掘り上げたたらつきよう漬けてこの夏の
健康願ひ伸びする深夜 高橋燿子☆

自家栽培のらつきようを一番美味しい
方法で処理して漬け込むまでの時間。家
族の顔を思いながら深夜にまで作業は続
き、終わったあとの固まった体を伸ばす
動作はその通りですね。

暑さの記録更新中コーヒーの香につれ
られて集まる家族 高橋燿子☆

連日の危険な暑さに不慣れな外出は避け
るよう、アナウンスまでされる今年です。
作者が入れたコーヒーの香りに家族が集
まった。和やかな日常がここにある。

十一月集

小林 貞子 山形

蜂蜜に黒にんにくを漬けこみて朝晩摂れと友言ひくれし
朝食めば黒蜂蜜に怠さ消ゆ夜の一匙眠りの深し

七月に唐黍百本消えたるを猿には非ずと人が噂す

唐黍の葉を損ねずに皮残し実のみ挽ぎとる手練れの仕業

骨折を重ねて弱りゆく義姉は声と食欲と笑顔失ふ

耳元へ生きよと言へば頷きて細き指さき差し出す仕草

窓外の朝霧のごと義姉逝けり九十歳の顔は安らか

何時しかに酷暑の夏も遠退きて寝間を吹きぬく涼しき夜風

二百二十日過ぎて木漏れ日白く澄み風は稲穂の匂ひを孕む

川 上 美智子☆ 高知

貰いたるオクラの苗が丈伸ばし八つ手のような葉が茂りたり

冬雷の表紙飾りし花なればオクラの咲くを樂しみて待つ

樂しみはオクラの花を愛でる事午後には萎む一日の花

雨後の水集めて下る谷川の瀬音微かな林道歩む

谷底の冷氣たっぷり含む風下草なびかせ林道に来る

冷氣吸いぐーんと伸びをしておればみんな蝉の威勢よき声

近頃はシニア世代も馴れ顔にスマホを翳しキャッシュレス決済す

間違いや小銭数える手間無いと高齢者等のスマホ決済

川 俣 美治子☆ 栃木

真夜中に雷雨の音で目が覚める久しぶりだと夢うつつにて

大きくは育たぬ茗荷暑さゆえ摘みて甘酢に樂しみは後

いつもなら冷菜並ぶ夕餉なり今日は熱々水餃子にほっとす

外にまだ暑さ残れる夜なれど虫の声して秋は近づく

空は秋暑さ残れど軽やかな風ふくなかに秋をおぼえる

九月の昼餉に素麺する時季節の感じ曖昧になる

如何ともしがたき皺を年月の証と思うこの頃のわれ

安 川 敏 子☆ 埼玉

雨上りの朝五時の匂い風に乗り濡れた木の香があたりを占める

退院後歩けなくなりリハビリを再開せねば籠の鳥なり

厳しくも暖かい訓練がんばって前進出来たら共に喜ぶ

杖なしで歩けた日には嬉しくて思わず握る暖かい手

最後の日過去の訓練思い出し涙ぐんでる私と先生

止むを得ず「デイ」を休んで七ヶ月今日再開す全てが新鮮

大 野 茜 神奈川

子の栄養になるとにはとり百羽飼ひし父なりき戦後の暮らし

枯れたかと庭に捨てたるサボテンに一輪の花朝に開きぬ
 麻酔医の顔一瞬におぼろなり廊下を進むベッドに醒めて
 スーパーに並ぶ目当ては備蓄米ひとつ手に受け礼を言ふ客
 若き日の父は相撲はつまらぬと言いつ晩年は場所を待ちて居たりき
 出羽三山その奥山に湧き出づるミネラル水飲み夏を乗り切る
 アマリリスの花に怪しき色気あり深き真紅に吸ひ込まれ行く

松居 光子 三重

古希の祝ひより早五年経ちしけふ後期高齢者の仲間に入りぬ
 厳しかる暑さに外出も儘ならず自ら赤飯炊きて祝ひぬ
 この暑さいつまで続くのだらうか予報聞きつつ溜息をつく
 雷の幾度も轟き夕立を待ち焦がれしに一雨もなし
 最寄りの駅にロータリーの完成しわが街少しく垢ぬけて来ぬ
 携帯をマナーモードに切り替へてメール消しつつ受診待ちをり
 順番の近づけば確と番号を仰ぎ見るなり電光掲示板

梶尾 栄子 兵庫

穂孕める稲田を囲ふ猪除けの柵出来猪は如何に生きぬむ
 傘寿たる同窓会に会へたるを誰彼無しによるこび合ひぬ
 学生の時より髪形変はらぬも白きもの増ゆゑくぼを見せて
 ふるさとの母校に未だ荷を負ひて尊徳像ありその足に触る
 免許証更新写真の撮影にマスク外せよ笑顔禁止と

「暑いね」に答へてくるる人の無く言ひつつクーラーのスイッチを押す

「ご機嫌は如何ですか」と彼の岸の夫思ひつつ上ぐ正信偈

新聞の休刊する間にショウヘイはホームランの数増やしてをりぬ

この暑さ命の危険と日日聞けど早くもおせちの広告のあり

戦後八十年八月

水澤 タカ子 山形

八月六日八時十五分時計に合はせ息子は梵鐘を突く

被爆直後の町をさまよふ平山郁夫の生の声聴くCDかけて

八月は被曝日本の役目あり核廃絶を世界へ訴ふ

長崎にも原爆の落とされて助かりし人も病に苦しむ

浦上を最後の原子野にと永井博士のこしし言葉を首相は取り上ぐ（長崎平和記念式典）

市戦没者追悼集をまたも手に青春奪はれし若者を思ふ

二十二歳で長兄はサイパン 二十歳にて次兄も戦死す頼りし兄たち

益坂 順子 福岡

長き間を仕舞ひこみたるミシンあけて久しぶりなる気持軽やか

日当りのなき庭隅に灯るごと日日草の点し咲きたり

雨降らず厳しき暑さにも耐へて九月に開くキツネノカミソリ

百日紅うす紅色の花房の緑の庭の夏を彩る

この年の矢筈すすきの青々と穂の脹らみて秋のはじまる

朝あさの躰操に着るけふのふく幌尻岳の山と文字入り

子も友も郵便すらも来ぬひと日敬老の日の静かに暮るる

残響集

井出 裕子 静岡

いつしらに生えたるムクゲの枝繁り酷暑の庭を真白に染める
台風の近づくを聞きつぼみ持つ枝を切り捨てごめんと詫びて
つぼみ持つ枝のいくつか瓶に挿す色なき居間に明るさの増す
九月の炎暑の中を友さそひ町で評判のかき氷屋へ

かき氷の硝子器を打つ匙の音涼しさ添へる残暑の午後に
用無き日はマックのランチと花の苗歸りに買ふを愉しみとして

羽田 孝輝 山形

春植ゑし六百本のサルビアに水遣り叶はず枯れてしまひぬ
あんぱまん今こそ世界へ飛んで行けガザへキーウへみんなを救へ
古稀祝ふ同級会を企画せり重ねる会議盛り上がる夏

この雨が二ヶ月前に降りたれば六百本のサルビア枯れず咲きしか
降り続く雨が一気に秋呼びて冬の仕度を案ずる九月

速達で出さねば締め切り間に合はぬ歌稿に追はるる月続きたり
庭先の梅擬の実は橙に日増しに赤く変はるを見つむ

児珠 純子 山形

朝日岳のてつぺんは立木^{たてき}番外地緑豊かなわが住む「立木」

朝日岳を源流とする朝日川その溪谷は家より十分

緩やかな登りの道がわが膝にちやうど良くして溪谷散歩す

日常を少し離れてわが体自然に委ね歩く清しさ

歩数計五千歩過ぎて折り返す現実に戻るまでの五千歩

エメラルドグリーンの清流の色変はる頃溪谷終り県道に入る

盆期間遠出せぬとも溪谷はわれを癒せるパワースポット

河原木 光 子 ☆ 広島

初めてのタペストリーに使うのは亡き友から譲られし布地

ネクタイの数本選びリメイクし夫婦揃いのポシエット作る

突然の仕事の職務変更は暫く家族に伝えられず

新聞の翁の歌を楽しみに開きて直ぐに名前を探す

吾と同じ認知症の姑と暮らす友の話に胸苛立てり

本に載る対処法を試せども解決できず悩みの続く

笑顔にて写真に映るこの人は笑顔失くして幾年過ぎる

片桐 美穂子 ☆ 神奈川

百周年迎えた新橋演舞場OSKは新トップになり

「ブギウギ」で応援してきた我の目に狂いなきこと舞台が示す

新トップ翼和希のまなじりに覚悟と決意静かに燃える

幕間に地下食堂で折詰の弁当食すも劇の楽しみ

父卒寿 子まご曾孫を前にして戦争体験語り伝える

九月号作品二評

井上 萱子

最上川河口にありてゆつくりと沈まぬ
太陽中天にあり 本間志津子
最上川河口の広がり、中天にある太陽は雄大な夏の風景。「ゆつくりと沈まぬ太陽」は、陽の長い季節を的確に表す。小鳥来て庭にすがしき声に鳴き心の霧が少しうすれる 東 ミチ

人間の慰めでは救われないことも、別世界の小鳥に救われている。心の霧が晴れるのではなく、「少しうすれる」のだから奥が深い。心情のよく通った歌。

白寿の叔母今日も畑へ押し車畑が好き
さと樂しげに行く 植松千恵子

白寿になっても畑に行く健康な叔母の姿が、「畑が好きさ」にいきいきと詠まれた。会話をうまく活かした。

小雨降る青葉の中にキンカンの白い花
見ゆ生ってくれるか 早乙女イチ☆
小雨、青葉、白い花、涼やかな材料で情景が爽やか。「生ってくれるか」は、

家族の誰かに話しかけているようで、キンカンとの距離感や期待があり温かい。

道尋ね返る言葉のやさしさに見知らぬ土地で心がゆるむ 川俣美治子☆

見知らぬ土地で受けたやさしさは心に沁みるもの。緊張感のゆるんだ状態がよくわかる。「返る言葉のやさしさ」は、見知らぬ町のみんなを表す作用がある。

午後三時ショートステイの施設へと母を迎えに行く日傘をさして 永野雅子☆

夏の午後三時はまだ暑い日盛り。「日傘をさして」が、暑い時間帯を具体で表した。ショートステイから歩いて帰るのも大変なことだと、評にならない感想も。

丘の上の我家下れば直売所取れ立て野菜を求めて千歩 大野 茜

「丘の上の家」メルヘンチックなすてきな家を想像する。野菜を求め千歩で帰る、千歩が入って急に現実的。

ひまわりの種をさかになに呑むビール猛暑の夏の昼下がりのよし 谷田律子☆
昼に飲むビールのつまみは、肉や魚のような重いものでなく、「ひまわりの種」

の軽いものがよい。猛暑を肯定的にとつて楽しんでる様子が気分よく伝わる。

この頃の野菜の新種目につきてけふ手にしたる玉蜀黍の白 益坂順子

「白」というのは珍しいといいつい買ったのだろう。主婦の心理をよく表した新種。

拾いたる日より三年足折れのカラスはわが家の家族になりぬ 卯嶋貴子☆

必要な事実だけを述べ、からすへの愛情が十分に詠まれている。足が折れているのに命があつてよかった。からすとても賢い鳥だから、主人の恩は忘れない。

明日の日も猛暑となるや満月の明るさ身に染む夜空は澄みて 野口秀子

澄んだ夜空の満月は、身に染むばかりの明るさで異次元の感じかもしれない。明日の猛暑の予感はこちらにある。

両親にあてたる手紙八百五十通「わたしは殺していない」と綴る 小嶋知葉☆
八百五十通の膨大な数と、「わたしは殺していない」の悲痛な叫びで、冤罪の前後を知らなくても心が痛む。

九月号作品二評

江波戸愛子

店を変へやうやく願ひ叶ひたりさくら
んぼわが孫にも届く 本間志津子

お住いはさくらんぼの産地として有名な県ですが今年は収穫量が少ないらしい、毎年楽しみにしているお孫さんに届けることのできた安堵感が伝わり受け取ったお孫さんの歓声が聞こえてくるようです。

小鳥来て庭にすがしき声に鳴き心の霧
が少しうすれる 東 ミチ

鳥のさえずりはストレス緩和にもっとも効果があるという研究結果があるらしい、その鳥の声を庭に聴いているうちに心を覆っていた霧がうすれてきたと詠む。この歌にうなづく人は多いのではないだろうか。

白寿の叔母今日も畑へ押し車畑が好き
さと樂しげに行く 植松千恵子

押し車を押してご自分の足で畑へゆく叔母さんは九十九歳その叔母さんをみる

作者のまなざしが優しい。

小雨降る青葉の中にキンカンの白い花
見ゆ生ってくれるか 早乙女イチ☆

降る雨に花が散つてしまわないかと心配をし結句に実りの心配をしている作者の姿がみえるようです。

小学生の日傘登校徐徐に増え時には仲
良く相合傘も 山本述子

この夏の暑さ対策に日傘登校をする小学生が増えてきているらしい、その小学生を詠んで子供達を見守る眼差が温かい。

道尋ね返る言葉のやさしさに見知らぬ
土地で心がゆるむ 川俣美治子☆

ひとりで訪れた初めての場所でお会った地元の方の優しさにふれたときのおもいが読む側にも伝わります。

常日頃頼る大工は一歳の娘を抱き来て
満面の笑み 大野 茜

作者の歌にときどき登場する大工さんの素顔を見た思いがしてお互いの信頼関係がよく判ります。

病んで知る変らぬ家族の愛情と包んで
くれる手の暖かさ 安川敏子☆

お互いを思いやる優しさが伝わってきます、普段はそれぞれが忙しいのでしょうがいざという時に頼りになる家族への感謝を詠んでいます。

日焼けた息子の顔に年を見る思えば
我も八十路を過ぎぬ 谷田律子☆

息子さんの顔にその年齢を思い、あらためて自分の歳を思ったと詠むこの歌に自身を重ねて読ませていただいた。

梅を採り籠を背負ひてうぐひすの声と
一緒に山降りゆく 松崎みき子

梅を入れた籠は重いと思うがこの歌に重さは感じない。うぐいすの声を楽しみながら降りているからだろうか。うぐいすの声を身近に聴くことができるよるこびを詠む。

膝痛の予防に「スクワット」五十回レッ
ドコードに身を委ねつつ 奥山清子

ご主人との踊りを長く楽しむための「スクワット」だろうか。それにしても五十回はなかなか難しいと思うがレッドコードを使っているという。痛む前に努力する作者の姿勢が素晴らしいです。

九月号作品三評

山本 三男

兄逝きて姉と二人で墓に参るまだ雨残る初七日の朝 羽田孝輝

四句目の「まだ雨残る」という表現に詩情を感じます。お兄さんのご逝去を題材にしており、ともすれば感情が全面に出てしまいがちですが、この歌は感情を抑えて歌っており余韻があります。

認知症の友への電話を控えれば半年後知る亡くなりしこと 新井光雄☆

最近では認知症との共生ということが言われており、認知症の人と共に生きていくという考えが広まっていますが、電話でのコミュニケーションは難しいと考えて電話は控えたのでしょうか。結句の伝聞の表現に寂しさを感じました。

今年こそ甘きスイカを作りたく動画に学ぶ基本の技を 塚本節子☆

作者は何年かスイカを作っているようですが、その出来栄えに満足していないのですね。最近ではスイカの作り方など

も動画でみられるようになり、作者の旺盛な学習意欲を感じました。

好物の薬味の茗荷の食べ過ぎと孫の誕生日を忘れた言い訳す 金子八重子☆

ユーモラスな雰囲気のある歌です。茗荷を食べると物忘れをすると言われていますが、それをお孫さんの誕生日を忘れた言い訳にしています。それも笑い話になったのでしょうか。

女郎蜘蛛ハウスの中は縄張りで貫録見せて睨み利かせる 越澤太郎☆

女郎蜘蛛の特色がよく捉えられている歌です。蜘蛛は植物に付く虫などを捕食するためそのままにしておくのでしょうか。

作者の確かな視線が感じられます。畑にて楽しみ貰ふ作鋤あり育つ過程と土の手触り 長澤千恵子

体を使つての農作業を楽しんでいる様子が歌が見事に表現されています。近年農業は機械化が進み土に触れる機会は少ないのではないかと感じていましたが、まだ作鋤は使われているのですね。

近隣のラジオ体操に参加せり顔馴染み

なく片隅に立つ 河原木光子☆

知っている人が来ているかと思つて参加したラジオ体操なのでしょう。馴染んだ顔が見えずに少し戸惑っている様子が感じられる歌です。片隅に立つという結句がうまいと思います。

われの名の「純」を提案したる叔父「名付け親だ」と幾度も言ふ 児珠純子
叔父さんの作者に対する思いが歌われていると共に、作者の叔父さんに対する思いが伝わってくる作品です。叔父さんがこの名前を付けたことに誇りを持っているように、作者もこの名前を誇りに思っているように感じました。

中庭で広げた本に舞い落ちる花びらの色母の口紅 手賀稔子☆

全ての言葉が活きている見事な構成の歌です。中庭で本が読めるような環境は羨ましいと思います。「母の口紅」という言葉に郷愁を感じました。作者はメルボルンにお住まいのようですが、日本とは季節が逆になるのですね。

九月号作品三評

橘 美千代

打ち覆ひ何度も取りて顔見つむ逝きたる兄に添ひ寝する夜 羽田孝輝

亡くなった兄に添ひ寝して一夜を過ごす。まだ信じられず何度も覆いを取つて顔を眺める。家族ならきつと皆そうするだろう。死別の夜の行動の描写に作者の悲しみがひしひしと伝わって胸を打つ。

認知症の友への電話を控えれば半年後知る亡くなりしこと 新井光雄☆

唯識論の学者であり唯識辞典を編み作者に贈呈し勉強会を催し哲学にも造詣が深い。この上なく優秀な方であった。その畏友が認知症と。ショックと事実と直面する怖さから電話を控えてしまった。その半年後に死を知る。儚く切ない。

知人逝きユーレイズミアップ歌う参列者と聖堂に響く葬送の曲 高藤朱美☆

外国語のカタカナは間延びするので二句目はユー、レイズ、ミ、アップを一言づつとし、うたうで七音となる。スコッ

トランド民謡調のイントロで導かれる美しいメロディだ。故人のリクエストであろうか。しつとりと心に沁み入る素敵な葬儀であったのだろう。

初めてのスイカの収穫五年前二歳の孫の笑顔なつかし 塚本節子☆

甘いスイカを作ろうと学んでおられる。実技の習得は畑で動画を見て作業しながら。五年前の初めての収穫を二歳のお孫さんはさぞ喜んだことだろう。目を輝かせ可愛い笑顔で。その笑顔のために。

身を挺し立ち向かふ人や家族らの誹謗中傷受くるに理不尽を思ふ 井出裕子
2019年に始まった新型コロナウィルスのパンデミック。未知のウィルスにワクチンも未だ無く膨大な犠牲者が出て全世界を震撼させた。まさに戦争であった。最前線で重症者の治療に当たった医師看護師らの医療従事者は命懸けの兵士であった。家にも帰られず休む間も無く次々搬送されてくる大勢の患者に対応された。後方に控える筆者は同業者として申し訳なく胸が痛んだ。そんな中、決死

の覚悟で治療に当たっていた方達が誹謗中傷されるといふ報道に接し激しいショックと憤りを覚えた。こんなことは日本ぐらいだとか。情けないと思つた。ゆえに筆者は「フロントライン」を見られない。

田面船夜の宮島漂えり願いをこめて囁は作る 河原木光子☆

宮島には「たのめさん」という農作物に感謝するお祭りがあるという。対岸のお稲荷様に向かって美しく飾り付けをしたたのも船を流し、対岸では流れ着いたたのも船を田の畦に飾る風習がある。夜の宮島を漂う船が非日常を感じさせて。

姫小百合もいちど見たいと横須賀の叔父よりメール届く初夏 児珠純子

姫小百合は宮城、山形、新潟、福島県など限られた地のみに群生する日本原産の百合である。ピンク色の可憐な花だ。姫小百合を見る「姪（作者）に会うことを意味するのだろう。高齢のため横須賀より出て来ることも叶わなくなった叔父への情愛に溢れ読むものの胸を打つ。

作品二

告別の式

小林 芳枝 東京

緩和病棟に入りて五日目漸くに義姉に会へる日朝より暑し
数年前に作り呉れたる籐の手提げ携へて出る猛暑日の朝
長男の妻めぐちやんの伯母として出会ひき二十五年まへの吉日
マンションに一人暮らせる朗らかな伯母ちやんを慕ふ四人の孫も
バブル期の建設会社に勤務して女傑のごとき逸話いくつか
白濱神社の海岸鳥居まで行きたいと岩場を走りき半年まへは
顔寄せて看護師の言ふ「今夜か明日」この世の時間短縮されて
病棟の夜の静けさ薄寒く二組の布団あり三人にて寝る
「最後まで守りますから」と言ひし甥剛くんに守られて進む告別の式

本間 志津子 山形

田や畑を街を潤す雨が降る四十日の日照りの後に
八階の月のホテルの大窓にわが住む酒田パノラマとなる
足もとに酒田駅あり南へと鉄路伸びゆく直線として
夕映えが薄れ雲間に昇る月眼下にともしびふゆる家々
信号の点滅見つつゆるやかに時の過ぎゆくただ中にゐる
寺の子はビジネスと言ふ一周忌新盆の法要進む暑き日

濃みどりの稲田に黄の色淡く差し炎天の中を風渡りゆく
車窓には西日を透かす秋の雲うろこのやうに広がりてをり

東 ミチ 青森

長月に入りて少しの涼しさにやさしき声にコホロギの鳴く
雑草を覆ひ隠して庭ぬちに西洋フジバカマ今咲き盛る
昔むかし「冬雷青森」の会ありしこと急に偲ばる歌作りゐて
老いとても一家を仕切る一人居の我れの今月を箇条書する
曇る日は玄関前のモミヂの樹の今年の小枝を切り取る仕事
箇条書したる我が仕事の大方は老いにはキツイ労働ばかり

植松 千恵子☆ 静岡

蝉の殻取ろうとしてもちぎれそう築八十年の梁にしがみつく
九十五歳が老後にやりたき事を言ふいつから老後か線引きできぬ
冷や汗や体調不良治らずに麻酔後遺症に夫は苦しむ
日柄ものと体調不良を励まされ元気な術後の予想外れたり
盆用意義母の口伝を守り継ぐ迎へ火焚きて安寧祈る
伝へ聞く我慢の戦中耐へがたく戦後八十年平和に感謝
手招きして席譲られた電車内年齢変はらぬ方と見受けたり

早乙女 イチ☆ 栃木

実りたるミカン重そうに下りおり少しもぎとり軽くしてやる
柚子の実が高高と生り見上げれば色つきはじめ朝日にかがやく

原因は不明なれど夏の風邪鼻水くしゃみ咳ありて辛し
洗濯機突然に鳴る異常音二十余年にお疲れ様言う

我が家の家電は長命なり久しぶりの電機店のなか別世界なり
記録的な猛暑の日々にも金柑は数多の実をつけ鉢にて生きる
八月の晦日なれども真夏日は続きて風の少し秋めく
雨の雫の落ちゆく様を眺めおり緩やかにして時の過ぎゆく

小学生の夏休み明けの日焼け顔ひときは遅し蝉の声高し
夕暮れに微かに響く虫の音に心和らぐひとときのあり
暑き日も湯浴みのあとはほつとする冷房疲れすつかり取れて
月一度共に麻雀保養所で待ち遠しいと言ひし友逝く
打ち水に青条揚羽寄り来てはわづかな水を吸ひをりぬ
雲もなく満月くつきりこれで良し皆既月食真夜中なれば
盆となり墓参のバスの増便に猛暑なれども楽楽参る

涙声にしばらく佇む姉を待つ従兄の家に共に行かむと
今日も又いとこ家族のサポートに向き合うわたしの隣に姉は
焦げはじめ鍋そのままに外に出て花を摘み来る従兄の妻は
焦げた鍋洗いて座りたる夫の動作妻には見えず

「本当に歩けないの」と又問えり夫の病を忘れたる妻

妻と子を置いては行けぬと施設への入所を拒む病みいる従兄
パーキンソン、アルツハイマー、精神病、三人家族の病それぞれ
「ここで死ぬ」と呟く小さき背を撫でて従兄に返す言葉を探す
三十年籠り守られたる従兄の子に訪問看護のサポート始まる

娘婿の両親に会わんとハル濱へ出立の日は数日後
故郷は黒龍江省国光村と聞けど場所がはつきり分からず
留守番の母は施設に三泊四日ショートステイの準備もありぬ
中国語話せぬ我は役立たず旅の計画義妹に任す
成田発ハル濱行きの飛行機が遅延しその後の乗り継ぎ如何に
ハル濱着高速バスに乗り換えて最前列で景色を楽しむ
ハル濱駅に流れる人を掻き分けて小走りで乗る定刻ぎりぎり

愛媛より来たという若き療法士にリハビリ受けるは女孫と同年
吾子三人近くに住みゐて有難し気遣いくれたり入院の日日
退院に長男夫婦の迎えくれ思いを残し四一一号室を出る
食卓にピーマントマトオクラあり水かけ草取り息子の労を知る
孟蘭盆に退院なりて親族の寄りくる今宵喜びいたたく
百日紅に止まり蜜吸う黒揚羽ささやかな風に揺るる小枝に

退院して二週間過ぎ杖なしで家の内を歩行出来るは嬉し
朝食を嫁の用意に頼りしが今朝は独りにて味噌汁つくる

卯 嶋 貴 子 ☆ 東京

外出がこわくなるほどの暑さの中心を決めて買物に出る
雷が鳴りひびいて久しぶりの大雨が土を潤す
ペランダの観葉植物は久しぶりの大雨受けて息ふきかえす
朝夕が少し涼しくなりてきて酔芙蓉が白い花を咲かせる

藤 田 英 輔 ☆ 高知

面会のフロアに入り名を告げるコロナ克服の母の見舞いに
ひらがなを形で覚えた二歳児はわれのなまえを声張りて読む
カチャカチャと忙しなく打つ足音に老犬の爪の伸びたるを知る
枝や葉の重なり合いたる固まりの砦の先に甘とうは待つ
久方の廻る寿司屋のメニューには「アホ」という名のデザートに星

津 田 美知子 岩手

打ち寄せて小石と共に引く波の碁石の浜を飽きず眺めゐる
高二の孫隙あらば直ぐ乗つ取りて夫の定位置の座椅子でくつろぐ
「その椅子はこの家の主が座るのだ」と孫を一喝す語気柔らかに
五十年共に暮らしたる姑に手合はせ拌む不思議な感覚
義母逝きて四十九日の過ぎたれど部屋の遺品の片付け難し
「手の震へ良くなるやうに」と迎へ火の煙を吾が手に子は摩り呉る

秋祭りの太鼓の稽古聞こえる残暑の中にて汗だくならむ
鉢巻きでワラサ一本捌きをり夕餉は刺身に鰯大根ぞ

小 嶋 知 葉 ☆ 茨城

わが夏の清涼剤は女子バレー気迫あふるる世界選手権
壁となる身長之差ブラジルにシャープに攻めるアタック強し
打たれても拾いあげたるレシーブのねばり強さに万雷の拍手
メダルには届かずともあっぱれと讃えてあげたい一人一人を
完熟のイチジク十個庭師よりいただく甘さにふるさと浮かぶ
松の葉の先端少し赤くなり庭師の顔が少しくもれり

九月よりロスにて学ぶ孫のこと知らせてくれる娘のライン
動画にて今朝も明るく語り合うニューヨークにて働く孫と

佐 藤 幸 子 山形

盆の十六日過ぎれば秋の風吹くと遙かに亡母より聞きしを憶ふ
クーラーの風を嫌ひて田に行くの外に出た夫五分で帰る
暑さ続く畑にゴーヤは延び続け数多の花に熊蜂群るる
一瞬を目の前かすめる糸蜻蛉池の睡蓮に紛れてしまひぬ

「ユニクロ」の夏シャツ売場のすぐ横にダウンベスト並ぶ九月朔日
「ユニクロ」店員の勧める速乾エアリズムシャツ九月十月も暑さ続くと
「こんにちは」と坊主頭の男の子熊鈴鳴らして走りゆきたり
朝の風がヘブンリーブルーを揺らしみて蟋蟀の声草むらより聞こゆ

「良子さん」と呼びなれた名も届かぬ所つめたく花の中に埋もれて
涙して別れをおしみ友送る心に残る思い出の数

斬新なひまわり色の服を着た友と二人でゴッホ展を見る

サンガラスつけマスクと帽子もかぶる人に声かけられてとまどう私
「御所ノ入館」の山肌に咲く野萱草高貴な人の墓をかざりて

八十路にてまだ夢を追う今日このごろ他人の視線気にしつつも

お茶のみに会に芙蓉という名の和菓子出て秋を楽しく集うよりみち

歌友より貰ひたる花咲きいだす赤いろピンクの百日草

赤色の百日草のきらやかに咲きたる二本選びて写メす

西風の緩やかな朝に目を閉じて流るる風を身体に受けむ

今年又地藏様参り朝は娘に送つてもらひ帰りは舎弟に

岩手の孫に六歳の祝ひセブンから送りて電車に乗り友と合ふ

緑色の和服姿の華やかに二十歳となりて孫正装す

あと幾度この日あるらむ鷹野湯に夫九十一の生曰祝ふ

「歩けない今日透析休む」とふ夫の異状なりと救急車呼ぶ

三時間後案内されたる三階に夫は入院患者となりたり

「明日来るね」「気を付けてげよ」最後の会話に快復信じ病院あとにす

急変の知らせ受けたる夜半の九時震へる足で愛車走らす

徐に目を開け聴診器当て「十時十六分」医師の告げるを他人事に聞く

臥す夫に微睡みもせず添ふ一夜昨日と同じに脹脛揉む

猛暑日の葬儀の朝に触れし頬その冷たさに夫の死悟る

自分から宿決め生曰祝ひたる十日後に夫は黄泉路へ発ちぬ

ばたばたとサンダルの音走りくるラヂオ体操の夏休みの児ら

「わたしを忘れないで」といふ花言葉の紫蘭が殖ゆる兄の中庭

ぢいちゃんにと帰省の孫が仏前でユーフォニアム吹く五中の校歌

店先の花火を見れば思ひ出づ夏休みに来る孫に買ふ兄

沢潟は我が家の家紋白き花咲いてゐるかと田の端を見る

夫が蒔きわれが土寄す畑の畝大根の種に明日雨予報

畦の草の刈り取りをして稲の穂の実り確む友は両手に

日焼け止め流るるほどに汗かきて浴衣で向かう朝顔まつり

地下鉄の階段上がれば照り付ける太陽の下に祭りの賑わい

朝顔のお守り授かる列長く団扇の風に涼みつつ待つ

数多ある店よりひとつ選べずに露店いくつもただ通り過ぐ

「お姉さん」売り子に声をかけられて団十郎を一鉢求む

朝顔を提げて寄りたる甘味処宇治金時で疲れを癒す

作品三

つつましく

新井 光雄 ☆ 東京

納豆に同じ値段で重さに差五グラムなれど軽くはあらず
納豆に味の差あるも年金の暮らしであれば重い五グラム
レストラン「子供食堂」トライする百円也のカレーライスを
一物一価それはウソなり同じ酒スーパーごとにけっこう違う
散策に必ず寄つてた喫茶店値上げで素通り帰宅し珈琲
買う本も全てが古本神保町二百円でも掘り出し物が
スーパーの片すみにある見切り品むかしの見栄は今どこへやら
クスリだけ貰えて助かる医者があり一月ごとから二か月おきに
コメ高騰夕食だけを加州米パンなりメンなり朝と昼とは

佐々木 政子 岩手

昼過ぎより雨の気配消え西方に青空見え初め天気定まる
暮れ残るひと時にして所在なく施設の外を一回りする
突然に大粒の雨音立てて降るさつと降りさつと止みたり
アパートに住み居し時に朝顔を咲かす友のゐて自慢を聞きさ
わが友は娘の都合にて時々来て施設に泊る 吾も娘に従ふ

七十年代半ばの男性家族みな逝きて入所といふ人生さまざま

岩村 知康 長崎

この郷にわれと同じき姓一戸ありて今なほ本家と呼びぬ
本家とは境界接するわが宅地おのづ他所への譲与あらざり
本家では遺棄地のごとき田畑の活用なども図りゐるとぞ
水田の贈与受くるに違ひない親戚が言ひ電話を掛くる
昼間には農事多忙と言ふ当主いま自宅とて急ぎ駆け付く
親戚と本家の当主の同席は肝要なると思ひゐしこと
わが持てる登記簿写し図面など渡し田畑の詳細しめす
二人には田畑の管理耕作にさも励めとて押し付くるごと
役所への届け登記はまだなれど田畑の処分ひとまづ終へつ

立石 節子 ☆ 東京

真上なる息子の書斎物音す午前二時にも明け方までも
骨を削る言われて放置四十年外反母趾の治療や如何に
このままで外反母趾を手術せず残りの歲月全うしたし
来日のブラジルの人訪ね来て書道の手ほどき漢字の話
日本語の表音文字と表意文字小学生からよくぞ使いきぬ
あとわずか今夜零時過ぎたれば明日一日は予定なき日よ

高藤 朱美 ☆ 茨城

道端のコンクリートを囲みつつメシヒバ茂りねこじやらし揺る

九月号 十首選

冬雷集 益坂 順子

熱中症アラート出でたる日の暮れて青
く澄む空満月うかぶ 森藤ふみ
鈍色の空に稲妻はしりきてやがてバタ
バタ騒めくヤツデ 山口 嵩
未来なき齢と知れどひとひらの木の葉
の舞ひにこころは遊ぶ 天野克彦
大きめの這ひ来る毛虫を潰したり咄嗟
にでなくちやんと見据ゑて 高橋説子
あの編み機今は何処にあるならむ眠れ
ぬ夜に故無く思ふ 大塚亮子
脳天の痺れるほどに蟬の声つよく響か
ふ木下陰に 橘 美千代
ゆるゆると杖ひきて行く道ながらすが
れたる花はらひなぞする 稲田正康
柿の実を喰ふため植えし柿の木に柿の
実のなる風情染しむ 山本三男 ☆
忘れぬし手提に塵紙など出でて硬貨一
枚のこりてをらず 姉川素枝子
事あれば絶えずぶつかる胸の内迷ひ惑
ひて昼にノンアル 井上楨子

九月号 十首選

九月集／残響集 山口 嵩

もう少し撥ねよところは言ひあるに
言ふ事聞かぬ指のもどかし 梶尾栄子
朝どりの胡瓜に塩振りばきはきとこの
年の味を独りたのしむ 児玉孝子 ☆
傍を飛ぶ蛭にそつと手を出せばふわり
掴まる中指の先 川上美智子 ☆
梶子のみどり深まる実と若葉に灰を撒
きやる虫よ寄るなど 藤田夏見 ☆
私達出会はなければ良かったね茄子の
葉裏の芋虫三寸 小林貞子
朝の庭に梅干しをれば裏山の憂ひ漂ふ
青鳩の声 佐藤幸子
探し物は見つけれられずに染み染みと空
を仰ぎぬ傘忘れきて 藤田英輔 ☆
荒れ果つる生家の庭の寂しさの極みは
父母思ひてやまず 岩村知康
雨上がりひたぶるに抜く庭の草蟹のご
とくに這ひつくばりて 長谷川 剛
驚くはこの生姜まで高くなりほんの数
ミリ惜しみつつ切る 首藤文江 ☆

「銀の鈴」で生日の娘と待ち合わせ宝塚を観る小躍りしつつ
茅乃舎のだし茶漬けを娘と食する鯛と七味の生の美味しさ
娘の家を出でて駅へと向かう道十三分の暑さ身に沁む
クルクルと蟬は仰向け足元に命終わるかぶどうの葉陰
庭の隅よりケセランパサラン追いながら白くふんわり風と歩きぬ
「手のひらを太陽に」から元氣もらう昭和平成令和の今も

塚 本 節 子 ☆ 茨城

メガピーマン五本植えたるは五月尽葉陰にひそむ巨き実ひとつ
メガピーマン長さ十三センチあり百グラムにて掌にずしり
肉厚の緑ほとばしるピーマンを一口かじれば甘さひろがる
炎天に茄子の葉も実も萎れたりひと雨欲しいと畑の黙す
三十八度の日の照るなかに里芋の葉丸く縮みてうなだれており
炎昼の葉陰にひそむ胡瓜あり糸瓜のごとく太く育ちて
稲の穂のしだれはじめて田のひかりひぐらしの声遠くかすかに

山 崎 猛 ☆ 埼玉

団塊世代のために建てたるアパートはタワマンに生まれ変わると聞きぬ
遠き日の蚊帳の中にて読みし書は今スマホにて冷房の中
夜半過ぎラジオを聞けば懐かしのメロディーに吾は興奮しおり
親のからだ支えし手なり八十路過ぎ今は吾身を支う手となる
スマホには着信ありてもすぐに出ず番号確かめ出る吾になり

外国で水を買うこと教えられ八十路を過ぎて水を買う吾

金 子 八重子 ☆ 千葉

祭りには参加をしない生き方をずつとしてきた太鼓が聞こえる
わたあめは儂いけれど癒されて祭りが心の支えだなんて
里芋の葉は焼け茎はしなびおり野菜は猛暑に降参頻り
ネパールの同僚去りぬ突然に言葉の壁を越えられぬまま
売り場には豊漁のポップが人を寄せ換気扇から秋刀魚のにおい
台風のもたらす雨の激しくて待ちくたびれた草木を潤す
まな板のへこみに水の溜まりおり新調をする踏ん切りつかず
いつの間に日の短くてコンビニのぼりは早くもおせちの予約

後 藤 恭 介 ☆ 茨城

今日もまた収穫したる鉢の大葉冷奴に素麺に乗せていただく
ゴーヤ苗成長するも花まばらようやく四つ実のなる晩夏
夏休み子らも参加のラジオ体操次世代育てる大事な行事
猛暑日にカラオケに集うシニアどちなじみの曲を熱唱するなり
台風の接近で家ごもりマンガ読む手塚治虫の『ブッダ』の長編
久びさの夏の旅行は箱根の宿仙石原に秋の風吹く

越 澤 太 朗 ☆ 茨城

ハウス棟の収穫終えたるミニトマト支柱もろとも根こそぎにする
葉隠れに取り残したる坊ちゃん南瓜つま先に探り二つ三つ採る

九月号 十首選

作品 一 石渡 静夫

ミニトマト初に色づく五つの実孫の来る日に摘もうと思う 松中賀代 ☆
初夏の夜風吹きくる水張田に信号の赤きらきら揺らめく 本郷歌子 ☆
夏の陽に沈丁花の葉は焼かれあわれ水やりだけでは足りぬ 伊澤直子 ☆
強烈な夏の陽射しに耐えきれず葉を丸めいる石路哀れ 永光徳子 ☆
風鈴の音ともなふ心地よき風に安らふ日の出の窓辺 戸部田とくえ
有願左眊すること多き我なれど自ら決めぬ施設に入ると 三好規子
うだるほど暑きときには身の凍る寒さと二択す答のいはず 佐藤靖子
消費税を守ると言ひたる政治家は民を守らず何を守るか 齋鹿ミヤコ
舌先に塩の一粒置くたびに島の泡盛美味しさ増して 野崎礼子 ☆
ふるさとの小さな洋画専門館立ち見常なり苦痛覚えす 飯嶋久子 ☆

九月号 十首選

作品 二 大塚 亮子

小鳥来て庭にすがしき声に鳴き心の霧が少しうすれる 東 ミチ
白寿の叔母今日も畑へ押し車畑が好きさと樂しげに行く 植松千恵子
戦なく平和な世界を願ひたる幼き文字の短冊揺るる 松居光子
道尋ね返る言葉のやさしさに見知らぬ土地で心がゆるむ 川俣美治子 ☆
丘の上の我家下れば直売所取れ立て野菜を求めて千歩 大野 茜
ひまわりの種をさかなに吞むビール猛暑の夏の屋下がりも良し 谷田律子 ☆
拾いたる日より三年足折れのカラスはわが家の家族になりぬ 卯嶋貴子 ☆
梅干になるその日まで日に何度漬漬覗き具合確かむ 松崎みき子
判決は無罪となるも失われし十五年は戻ることなし 小嶋知葉 ☆
肩痛め草を耒らぬ庭の辺に真白く咲ける哉草の花 奥山清子

青虫は身をくねらせて草の中蛹となるまで姿見届く
トラクターの泥を落として油さしグリース塗ってオイル交換す
畑の上を双発ジェット機定期便轟音残して成田へ向かう
草むらに一輪咲きたる百合の花夏の盛りに香り微かに
手を休め一息入れるこの頃は休み休みの作業となりぬ
土つくり教えてくれし農の師は早三回忌草葉の陰に

首 藤 文 江 ☆ 埼玉

束の間の涼しさもたらず夏の夜道を歩める人声遠く
窓際に風鈴吊しこの夏の無事祈りおり絵馬捧ぐごと
先行きの不安な暮らしに願ひ込め投票終えて素麺啜る
誰一人会うこともない炎天下流れる汗が頬を伝わる
懐かしい線香花火をもう一度子どもに還り火花散らせたい

松 田 忠 一 ☆ 山形

蔵野を摘み登り行き下り来て谷の清水に吾甦る
酷暑の日暮れて月無き天の川夜間飛行の明りがわたる
日焼けの児らの歓声ひびき光るしぶきやさしき川の音あの夏何処
稲妻に少し遅れて鳴る雷待ちわびし雨ささやかに降る
夕暮れて迎え火灯し参る墓戒名たどり祖霊を偲ぶ
八十年自由の槌音木霊するふるさと何故に限界集落
友の歌う長持唄はなおさらに親のまごころ切なく溢る

長谷川 剛 山形

楚々としてミニスカートの似合ふひと共に暮して半世紀過ぐ
喜寿の妻を祝ひて孫子集ひたり祝着纏ひて夜の更けるまで
朝早く吾子「おはよう」と帰省するいつも唐突お盆のはじまり
伝説の念仏踊りで雨乞ひすされど届かぬ龍神様へ
岩肌に見音様の彫られる乱れた人心救ふがためとふ
畝をたて小さき種蒔き土被す秋蒔き大根の季節めぐりて

長 澤 千恵子 山形

この夏も子供や孫達帰省して賑やかに盆の墓参りする
朝顔は命繋いでこの年も肥塚覆ひ枯れ草隠す
茄子貰ひお茶に呼ばれて語り合ふしくじり話や思ひ出話
朝採りの胡瓜おくら紫蘇茄子で夏定番の「だし」作る
本州の果て青森へ家族旅夫と子が車の運転をして
民宿の夕食に出た山盛りのウニに満足し早目に休む

今 野 澄 子 山形

蝉の声遠くなりたる夕べには虫の音聞きて秋の近づく
庭を掃く親を真似つつ箒持つ塵散らばれど幼児愛らし
親と子は影を追ひかけ遊びをり老いたるわれらは子育て偲ぶ
社からででつぽと鳴く声す静かな朝の目覚めの合図
ノリウツギの大きな花房華やぎて真白き花は青空に冴ゆ

九月号 十首選

作品三 天野 克彦

火葬終へ骨拾ひても未だ兄が逝きたる
ことを受け入れられず 羽田孝輝
ほおばれば甘味と酸味と皮具合い今年
のトマトも味わいの良く 高藤朱美 ☆
友よりの喜びの声都営住宅に入居決ま
ると電話入りたり 山崎 猛 ☆
咲き初めたるひまわりの花命日の父の
墓前を明るく照らす 塚本節子 ☆
ズッキーニ葉陰に育ちすぎていてヘチ
マの如き姿になりぬ 越澤太朗 ☆
妻からの誕生祝いのプレゼント木工作
家の書見台なり 後藤恭介 ☆
我の身を守り給えと願ふより託び多く
なる母の命日 今野澄子
近隣のラジオ体操に参加せり顔馴染み
なく片隅に立つ 河原木光子 ☆
忘れまじ3・11大震災花ガールと
歌「花は咲く」 松田忠一 ☆
蟹穴ができて玄米炊き上がる見せてと
せがむつぶらな瞳 手賀稔子 ☆

歌集/歌書 御礼

編集室・佐藤靖子

■山中律雄歌集

『光園』

令和七年八月五日発行、三三一首を
収めた第六歌集である。今は四苦にな
る前の生老病の状態とあるが、作品か
らはゆったり静かな不断のままの暮ら
しを感じる。歌書に『川島喜代詩の添
削』あり、これを含め歌集賞歴あり。『新
運河』代表。

住職としての生活から。

盆の経分けて息子と回りをりと
五十軒気がとほくなる
みほとけの帰依篤きひと難病に神
の洗礼受けたりとぞ
亡き人は穢れにあらず身洗ひと言
ひて清めの酒など飲むな
治療のことなど。

杖替りと言へば妻にはすまないが
この頃ともに出ること多し
抗癌剤飲む飲まざるの優劣はいづ
れかけふも吐き気がつく
初雪のころよりわが手荒れはじめ

雨降らず植ゑし野菜の葉は枯れて旱の畑にスベリヒユ伸ぶ

和田 妙子 山形

水やりに答ふるごとくまた一つくちなしの花咲きゐてをりぬ

数本の百日紅の花咲きにけりもうおしまひとあきらめたる朝

休日の中央線の優先席スマホ片手に座る若者

背を伸ばし再び向かふ行く先は猛暑の中のアイスアリーナ

歌ひ手の思ひまつすぐ届きくる三年ぶりのライブ楽しき

手 賀 稔 子☆メルボルン

陽だまりに呼べど応えぬ老犬の瞳の奥に我はまだおり

子を持たぬ友を羨む日もありて夾竹桃の赤目に沁みる

鈴木 裕 子☆千葉

にちにちの出来事を短歌にする途端些細なること非凡となりぬ

夕暮れの秋立つ風の頬撫でる冗談じゃないよ明日も猛暑

道端で餌をもらいし桜猫そうかお前もついに家猫

いつも来るお盆の時期の茶色のバツタうちではそれを父さんと呼ぶ

孫が来た電話の母の弾む声「腰は痛いし足もいたいし」

何食べたい訊かれる前に母に言う「少しの野菜とコロツケ5個」と

通勤時朝陽さす路じりじりと木槿だけが空向いて咲く

電車内天気予報図千葉だけが1℃低いとあるはうれしい

(☆印は新仮名遣い希望者です)

病みて瘦せたる指に滲む血

意識下の時というもの。

自動車も人も時間に選ばれて交互

に青き信号わたる

絶え間なく桜はな散る村の道きの

ふとおなじ人がゐて掃く

風さむく吹く高原の穂すすきが入

り日にさやうならしてゐます

光。

いきほひの異なる風に笹原をわた

る光は濃淡のあり

うちつけに闇のなかりあらはれ

て蛾が外灯の光圏を飛ぶ

意識せず使っている仏教用語を改め

て調べたり、身口意などは初めてと

言ったら笑われるだろうか。

(新運河叢書第二十一篇 現代短歌社刊)

■戸井田聖子歌集

『世界中の桜がぜんぶ咲いたら』

令和七年七月六日発行、四〇九首の
第一歌集である。タイトルには楽しい
ことの始まる予感がある。著者の愛息
が小学入学直前に言った言葉からとつ

てある。相聞、結婚、子育て、自分を詠い、
なかでも子とのかかわりの歌が強く訴えてく
る。「彩」短歌会。

二十歳代の作品か。相聞歌らしい中に別れ
るのか、また新しい出会いかと思うものあり。

ひっそりと垣根に実る烏瓜ことばより濃

く秋を知らせる

ゆったりと濺み流るるメナム川 ころこ

ほどけと諭されてゆく

君からの急な誘いを予感する今日ピンク

のニットを着よう

船上に働く君と船上に働きし父のは尽き

ず

子と一体のようなころ。

金目鯛の煮汁ざざと飯にかけ 吾子の

食べかた父の食べかた

洞窟を目指し石段駆け上がる吾子船越鉈

切神社（千葉船越鉈切神社）

ゲームに集中する子と静い絶えなくなる。

e スポーツで世界へ出で行く夢あれば

まずは英語のマスターになれ

不機嫌な息子は居ないものとしてヘッド

ホンして飲むビノ・ノワール

鎖す部屋の扉を

喰う、を使つたすばらしい歌ほか。

名物の梶木鰯の兜煮の骨も崩してしわし

と喰う

さわさわと多に枇杷の実熟るるな雨が匂

うよ日暮の風に

(ながらみ書房刊)

伝田幸子歌集

『勿忘草』を読む

桜井美保子

信濃に暮らす歌人伝田幸子氏の第七歌集

で二〇一八年から二〇二五年春までの作品

四六八首を収めている。

吹雪かれて枝折れしたる樹、吹雪かれて

枝をなびかせ耐へてゐる樹樹

高原地帯の林だろうか。「吹雪かれて」の

繰り返しが恐ろしいまでの厳しい自然に生き

る樹々の姿を捉えている。

太幹のみづみづしさを内包し神秘的なる

根開け現る

根開けしてしづかに春のこゑを上げカヤ

の平の樹木の芽吹き

「カヤの平」は志賀高原の北に位置する広
大な高原。まだ私などは行ったことがなく、

伝田氏の「根開け」の一連を鑑賞して心を遊

ばせている。幹の根元周りの雪が円形に溶け

てくる根開けが春を告げる。樹木の呼吸を、

その声を作者は確と受けとめている。

家族らのためにと亡母の手打ち蕎麦の深

き味はひ今も忘れず

手打ち蕎麦は実に美味いと父言ひにき

無口なりし人の瞬時の笑顔

信州の代表的な郷土食と言われる蕎麦。気

候と水が蕎麦の栽培に適していて、家庭でも

手打ち蕎麦という食文化が根付いているのだ

ろう。母の作った手打ち蕎麦が家族の心を温

かく包み、幸せな気持ちにさせてくれるのだ。

しみじみと思ひ出す母の手打ち蕎麦の味。

我が腎臓に針四本を打たれたり医師らの

会話微かに聞こゆ

嬬やかに生きて行かむと箸をとる術後三

日の味噌汁薄味

一首目は大病をされて手術中の様子。緩や

みじみと味わっている。快復への道を一步一步。

いつしかに夫も厨に立ちくれて会話をすれば薬缶も弾む

病後の家事を助けてくれる夫とのひととき。夫婦の会話が湯気を立てている薬缶も賑やかに加わっている。

吹かれぬ五月の柳のなやかさわが髪吹かれ季節をわたる

髪を詠み込んで女心、詩心の感じられる印象的な作品。古来、女の髪の長く美しいさまを柳に喩えて「柳の髪」と言うそうだ。風に吹かれつつ柔軟に生きる姿が見えて素敵な一首。

艶の良き丸茄子の皮ピーラーで剥き始めて夫たのしげに

最近のピーラーは機能的なデザインで切れ味がいい。軽い力で野菜の皮が簡単に剥ける。楽しい気分になる調理器具である。結句に共感。

洋傘に身を覆はれて歩みつつ心を覆ふ傘はいづくに

「物作りは命がけで」と眼を凝らす店主の指先曲がりてゐたり
雨や雪から身を守ってくる傘。心まで覆つ

で守ってもらいたいものだ。年老いた店主の長年の仕事ぶりを示すその指先に作者の目が止まる。

麗日に勿忘草わすれな草の咲く小径深きおもひを抱き歩めり

たくさんの方の充実した作品に出会える一冊である。

■ご批評御礼……………(編集室)

新アララギ 2025年9月号

「歌壇座標」より

花見ればどこか何かのほぐれゆく感じのしきり鉢の軽く 大山敏夫

もうだめとおもふことなど牛の肉焼きてたうぶるうちにうすらぐ

【入江晴栄】「冬雷」七月号「冬雷集」より

小題「近くのさくら」九首より取り上げた。

作者は「冬雷」の編集発行人。作品はどれもわかりやすく、淡々と詠むが完成度が高く読者の心に素直に入ってくる。理屈ではなく作者の情感が読む者の情へと訴えかける。前の歌、咲いた桜を見ているとふつと心が何処かへ持って行かれるような体が浮くような感じになることがあるが、その感じを巧みに詠

う。「何かのほぐれゆく感じ」に実感がある。心の写生である。後の歌、ある年齢を過ぎてより私も美味しいものを食べると現実のいろいろな事を忘れ解放されるような至福感がある。この一首わかるわかると大いに共感を覚えた。

この連作を読み、今更ながら、歌とは作る人とそれを読む者との心のやり取りであると感じた。

【星 邦子】前の歌、桜を見上げる作者は「鉢

の軽く」なったようで「どこか何かのほぐれゆく感じ」だと詠う。いざ桜を詠おうとするとな数々の名歌が想起されつついつい構えてしまふののだが作者はほぐれる身体感覚を日常的な用語で詠いかえって新しい桜の世界を提示する。後の歌、「もうだめとおもふ」と窮地を端的に表現し「牛の肉焼きてたうぶる」という行動を経てその思いが「うすらぐ」結果を一首中に起承転結風に描写し誰の中にある記憶を呼び覚ます。小題最後の歌「そんなにも頑張らなくて良いと思ひ拳を握る映像を消す」からも作者は日常生活の些細な場面を世間的な価値観に束縛されず柔軟な感性で捉え平易に言語化しようと工夫を重ねる歌人だと思ふ。



編集後記

▽「冬雷の表紙絵をたどる」が復活し何やらほっとした気分になった。冬雷の歴史の一端をたどる意義ある欄をゆつくり楽しみたい。▽編集長が書いておられるように毎月の原稿の締切日を守ることは雑誌を遅刊なく発行するためには重要なこと。郵送の場合、締切日が配達のない土曜、日曜にかかることもある。日にちに余裕を持つて投稿しましょう。

▽パソコンがスマホで選者のEメール宛に作品を送れるようであれば、ぜひそうして頂けると有難い。その場合は歌と歌の間を一行空けずをお願いしたい。

▽十年ほど前から横浜の磯子区に移り住んでいるが、磯子区は美空ひばりさんの生地。そんなわけで大山氏の連載「ひばり論」に親しみを持っている。（桜井美保子）

▽孫を詠んだ歌は、孫可愛さに抑えがきかず自己満足に陥りがちになり、良い歌になりにくいか。孫歌などと揶揄的に呼ばれたりもする。私事であるが、先日筆者にも初孫が生まれ、孫の歌を詠む気持ち がわかつてきた。緊急の帝王切開で生まれた。まだ心の準備ができていないままいきなり祖母になった。今はただ大きく育ってほしい。今月号の高橋さんの歌。十二歳で亡くなったお孫さんを偲ぶ歌が切なく胸に響いた。

▽冬雷大会が迫っている。プレッシャーと期待と。（橋美千代）

▽都合により休載であった目次上の「冬雷の表紙絵をたどる」を復活させた。折しも昭和45年に開かれた大阪万博の絵となった。この後記を書いている今現在、大阪では万国博覧会が開催中なのだ。タイムリングも良かった。

▽郵便事情が著しく悪くなって、郵送による作品投稿には神経を使うようになってきている。同じ関東圏

においても、普通郵便だと一週間は見えておかないとならない。どうぞ御用心なされ、早めの投函をお願いする。原稿締切に間に合わないといと小誌発行が遅れてしまう。何卒締切厳守を。締切日厳守は郵送に限らず、メール投稿も同じ。又編集委員も同じだ。（大山敏夫）

ずきさんからのメールに「こちらは朝晩暖房を入れるほどになりました。すっかり秋の景色です」とあり、少し心が落ち着いた。

▽六月から続いた今年の暑さは九月になつても治まらず、熱中症危険という日が三ヶ月も続いた。夜に朝は窓を開けるのだが直ぐに苦しくなってしまう。やつと九月十八日の夕方頃から急に北風が吹いて気温が下がりはじめた。「暑さ寒さも彼岸まで」という諺が頭を過るがまだ油断はできない。何処に何が起こるのか解らないほど最近の天候は荒れている。昨日(九月二十四日)カナダのブレイクあ

▽新人会
鈴木裕子氏(紹介永野雅子)

《冬雷規定・掲載用》

- 一、本会は冬雷短歌会と称し昭和三十七年四月一日創立した。(代表は大山敏夫)
- 一、事務局は「東京都葛飾区白鳥四の十五の九の四〇九 小林方」に置き、責任者小林芳枝とする。(事務局は副代表を兼務)
- 一、短歌を通して会員相互の親睦を深め、短歌の道の向上をはかると共に地域社会の文化の発展に寄与する事を目的とする。
- 一、会費を納入すれば誰でも会員になれる。
- 一、長年選者等を務め著しい功績のある会員を名誉会員とする事がある。
- 一、会員は本会主催の諸会合に参加出来る。
- 一、月刊誌「冬雷」を発行する。会員は「冬雷」に作品および文章を投稿できる。ただし取捨は編集部一任とする。「冬雷」の発行所を「川越市藤間五四〇の二の二〇七 大山方」とする。
- 一、編集委員若干名を選出して、合議によって「冬雷」の制作や会の運営に当る。
- 一、会費は年額(購読料を含む) 次の通りとし、六か月以上前納とする。ただし途中退会された場合の会費は返金しない。
*会費は原則として振替にて納入する事。
A 作品三欄所属会員 一四〇〇〇円
B 作品二欄所属会員 一七〇〇〇円
C 作品一欄所属会員 二〇〇〇〇円
D 維持会員(二部購入) 二六〇〇〇円
E 購読会員 八〇〇〇円
- 一、この会則は、二〇二〇年一月一日より執行する。

《投稿規定》

- 一、歌稿は月一回未発表9首まで投稿できる。原稿用紙はB5判二百字詰めタテ型を使用し、何月号、所属作品欄を明記して各作品欄担当選者宛に直送する。原稿用紙が二枚以上になる時は右肩を綴じる。締切りは十五日、発表は翌々月号。担当選者は原則として左記。
冬雷集・作品三欄(メール投稿分)
・担当 大山 敏夫
・担当 桜井美保子
作品二欄・作品三欄(手書き投稿分)
・担当 小林 芳枝
・担当 小林 芳枝
- 一、表記は自由とするが、新仮名希望者は氏名の下に☆印を記入する。
- 一、無料で添削に応じる。一通を返信用として必ず同じ歌稿を二通、及び返信先を表記した封筒に切手を貼り同封する。一週間以内に戻すことに努めている。添削は入会後五年程度を目処とする。
- 《Eメールでの投稿案内》
白地に一首ずつベタ打ちにして、行間も空けないこと。頭を一字分空けたり、一首を二行に分断したり、余分な番号を付けたたり、色を付けたたりしないこと。分量の少ない場合は通常のメール本文、又はケータイ・スマホでも送信可能。
Eメールによる投稿は左記で対応する。
大山 敏夫 tourai-ooiyama@nifty.com
小林 芳枝 kysie@nifty.com
桜井美保子 mhoko496@s4.dion.ne.jp

《選者住所》	大山 敏夫	350-1142 川越市藤間	540-2-207	☎	090-2565-2263
	小林 芳枝	125-0063 葛飾区白鳥	4-15-9-409	☎	03-3604-3655
	桜井美保子	235-0022 横浜市磯子区汐見台	2-2-2-608	☎	090-6029-0590

2025 年 11 月 1 日発行

編集発行人 大山 敏夫
データ制作 冬雷編集室
印刷・製本 (株) ローヤル企画
発行所 冬雷短歌会
350-1142 川越市藤間 540-2-207
電話 090-2565-2263
事務局 125-0063 葛飾区白鳥 4-15-9-409
振替 00140-8-92027
ホームページ <http://www.tourai.jp>

頒 価 700 円